

# 戸神吉田遺跡

渡辺林産工業株式会社工場移転に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 8

沼田市埋蔵文化財発掘調査団







# 戸神吉田遺跡

渡辺林産工業株式会社工場移転に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

沼田市埋蔵文化財発掘調査団







## 序

近年、沼田市は、関越自動車道建設工事を契機に、大規模な土地改良事業、学校建築、工場建設など各種開発事業が計画され、実施されつつあります。これら事業区内には埋蔵文化財が存在することが多く、その保護対策が急務となっています。

今回の発掘調査は、渡辺林産工業株式会社工場移転工事に伴い、やむなく遺跡の破壊される部分について、事前に実施したものです。

この成果は、近接している石墨遺跡や戸神諏訪遺跡など関越道関連の大規模調査の結果と合わせ、この地区における古代史解明の重要な資料となることでしょう。

本調査実施にあたり終始御指導、御協力をいただきました関係者の皆様に心から厚く感謝の意を表し序文といたします。

昭和63年 3 月

沼田市埋蔵文化財発掘調査団

団 長 千吉良 直 太



## 例 言

1. 本報告書は渡辺林産工業株式会社工場移転に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は群馬県沼田市戸神町字吉田868番地外に所在する。
3. 発掘調査は昭和62年6月17日～7月10日まで実施し、整理作業は昭和63年1月5日～3月31日まで行った。
4. 発掘調査は、沼田市埋蔵文化財発掘調査団が、渡辺林産工業株式会社の委託を受けて実施した。
5. 調査体制は以下の通りである。

団 長	千吉良直太	教育次長	発掘担当者	小池 雅 典	社会教育主事
副団長	生方国太郎	建設部長	調 査 員 (兼)	〃	〃
	〃 北 沢 進	経済部長	事務局長(兼)	藤 井 正 久	社会教育課長
顧 問	杉木栄次	助役	事 務 局 員	新 井 康 裕	社会教育係長
	〃 佐藤国利	教育長	〃	兼 弘 武 久	都市計画係長
	〃 金子捨次	総務部長	〃	茂 木 吾 郎	都市計画課主事
幹 事	青柳迪夫	企画財政課長	〃	武 井 博	工業振興係長
	〃 松井誠二	庶務課長	〃	津久井富子	社会教育課主任
	〃 藤井正久	社会教育課長	相 談 員	水 田 稔	文化財調査委員
	〃 生方長命	都市計画課長	〃	石 北 直 樹	昭東中教諭
	〃 小野里靖夫	商工課長			

6. 発掘調査作業員は次の通りである。(敬称略)  
石塚タミ、内山春夫、大島はる、小林アイ、佐藤芳之助、佐藤こと、七五三木たつ、野上己津江、野村 武、笛木栄子、保坂隆子、丸山けさ江
7. 本書の執筆・編集は小池雅典が行った。
8. 遺物の実測・図版作成は次の作業員が行った。  
川端千恵子、後藤多貴江、斉藤智恵子、竹之内信子、高橋洋子、笛木栄子、保坂隆子
9. 本書に掲載した写真はすべて小池雅典が撮影した。
10. 本遺跡の資料は、当調査団より沼田市教育委員会に保管責任が委譲され、沼田市文化財調査事務所収蔵庫で保管されている。
11. 発掘調査及び本書の作成において次の方々から御指導、御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

渡辺林産工業株式会社、群馬県教育委員会文化財保護課、木桧多嘉造、角田 景



## 凡 例

1. 遺構配置図、遺構図中の方位は磁北を表わす。
2. 遺構挿図中に記載した断面基準線の数字は海拔高である。
3. 挿図の縮尺は以下のように統一した。  
住居址…………… $\frac{1}{60}$ 。 遺物…………… $\frac{1}{3}$  (紡錘車 $\frac{1}{2}$ )
4. 遺物挿図中のスクリーントーンは赤彩を表す。
5. 遺物観察表法量覧の ( ) は推定法量である。

## 目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査に至る経緯と遺跡の環境……………	2
1 調査に至る経緯……………	2
2 遺跡の位置と環境……………	2
3 周辺の遺跡……………	2
II 調査の方法と遺跡の概要……………	4
1 調査の方法……………	4
2 遺跡の概要……………	4
3 基本層序……………	4
III 検出された遺構と遺物……………	6
1 住 居 址……………	6
2 遺構外出土遺物……………	20
3 そ の 他……………	23
IV ま と め……………	24
写真図版……………	P L 1～11



## I 調査に至る経緯と遺跡の環境

### 1 調査に至る経緯

渡辺林産工業株式会社の沼田工場が沼田市戸神町字吉田899番地外に移転することがほぼ決定し、昭和62年3月にその概要が市教育委員会に報告された。教育委員会は、工場移転地の一部が遺跡の包蔵地であると予想されたため、その旨を会社に伝えその保存について協議することとなった。遺跡の範囲や性格を把握するため市教委で試掘調査を実施したところ、住居址と推定される落ち込みや、多数の土器片を検出し、約7,500㎡の包蔵地が工場敷地内に存在することが判明した。引き続き会社側と協議した結果、掘削するのは水路部分のみで他はほぼ現状のままとすることで合意が得られた。発掘調査は市埋蔵文化財発掘調査団が会社側から委託を受け、水路敷設定予定地を中心に実施することとなった。遺跡の名称は字名をとって戸神吉田遺跡と命名した。

### 2 遺跡の位置と環境

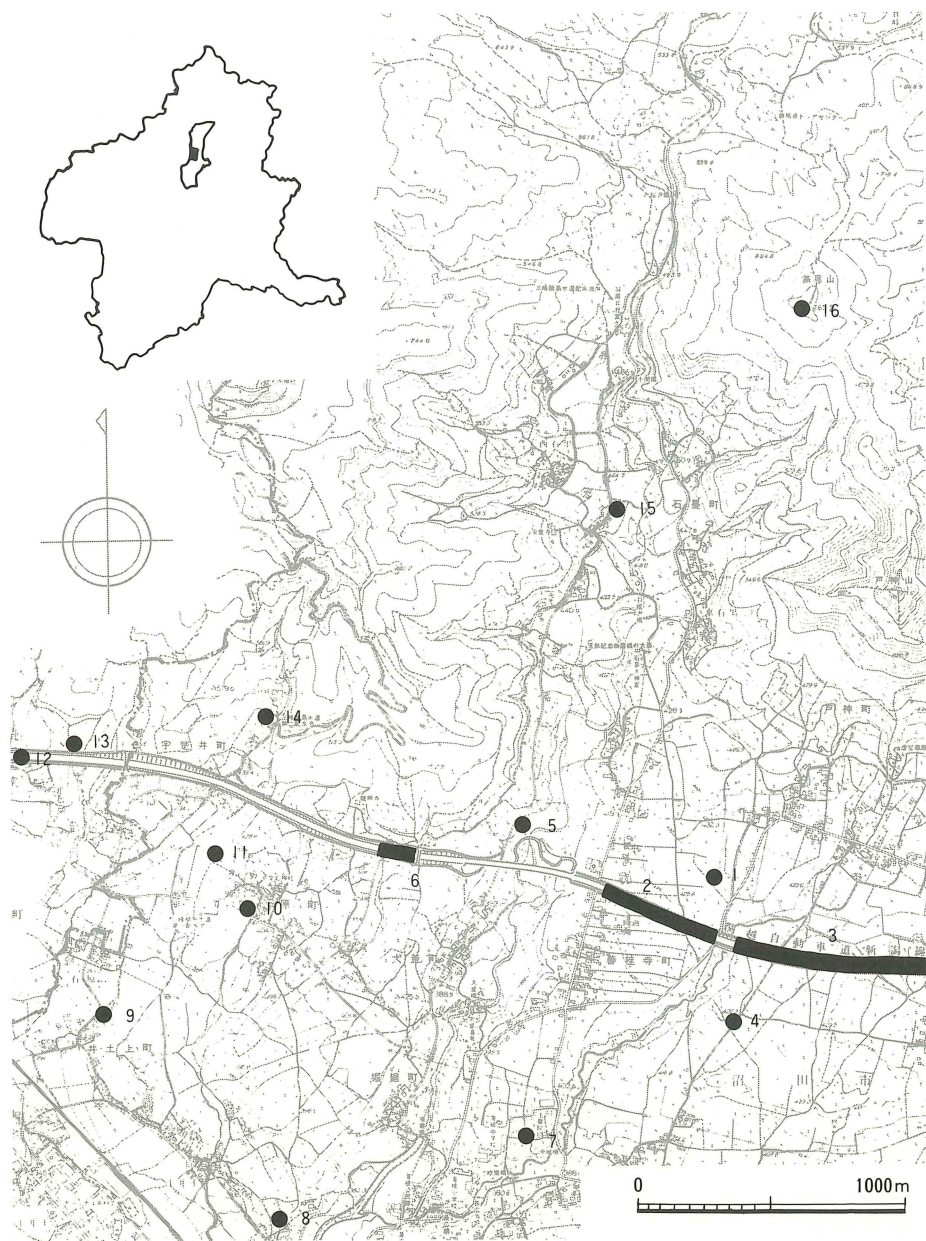
戸神吉田遺跡は、沼田市のほぼ中央に所在する。この地区は、薄根川と四釜川に挟まれた段丘面で、北を戸神山、東を峰山丘陵に囲まれた東西約2km南北約1kmの広大な平坦地である。遺跡は上位段丘面の西側にあり、四釜川とその支流である小沢川との間の微高地上の東端に位置する。標高は423m～426mで、小沢川からの距離は125m、比高差は6mを測る。現在の舌状台地上は畑として利用されている。

### 3 周辺の遺跡

**旧石器時代** 旧石器を出土する遺跡は、関越自動車道建設に伴う発掘調査により三峰山南麓から西麓において集中して存在することが判明しており、多量の石器を出土した後田遺跡(12)が有名であるが、当市においては薄根川右岸の最上段に位置する戸神諏訪遺跡(3)があげられる。現在整理中であるため詳細は不明であるが、岩宿Ⅰ文化に対比される層よりナイフ等が検出されている。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は薄根川と四釜川の間段丘面に多く存在するが、表採により確認されたものがほとんどである。土地改良事業に係り発掘調査された寺入遺跡(15)からは、中期を中心とした住居址18軒と土坑25基が検出され、遺物も中期を中心として早期～後期の資料が多量に確認されている。また本遺跡に近接した石墨遺跡(2)からは、早期の住居址と落とし穴が、小沢川を挟んだ対岸の戸神諏訪遺跡からは前期の住居址と落とし穴が検出されている。

**弥生時代** 弥生時代の遺構は、後期樽式期の資料がほとんどで段丘面上に分布する。石墨遺跡からは住居址10軒と円形周溝墓が、戸神諏訪遺跡・諏訪平遺跡(8)からは住居址が検出されている。



第1図 戸神吉田遺跡の位置と周辺の主な遺跡

- |              |            |                    |                     |
|--------------|------------|--------------------|---------------------|
| 1 戸神吉田遺跡     | 2 石 墨 遺 跡  | 3 戸神諏訪遺跡           | 4 土塔原遺跡             |
| 5 大釜漏1号古墳    | 6 大 釜 遺 跡  | 7 小 沢 城 址<br>(室 町) | 8 諏訪平遺跡             |
| 9 荘 田 城 址    | 10 原 町「経塚」 | 11 原 町 古 墳 群       | 12 後 田 遺 跡          |
| 13 金 山 古 墳 群 | 14 宇楚井古墳群  | 15 寺 入 遺 跡         | 16 高王山城址<br>(安土・桃山) |



**古墳時代** 集落は段丘、丘陵上に多く分布するが、前期と後期の遺構がほとんどである。戸神諏訪遺跡では前期の住居址が、石墨遺跡からは前期・後期の住居址が良好な一括資料とともに多く検出されている。古墳は、集落を臨む山裾の傾斜地に築造される例が多く、ほとんどが後期に属すると考えられる。宇楚井・原町古墳群（14・11）が知られているが、発掘調査されて詳細を知ることができるのは大釜漏 1 号墳(5)と月夜野町の金山古墳群(13)である。

**奈良・平安時代** 該期の遺跡は、前時代の遺跡とほぼ複合している。しかし、奈良時代の住居址は少なく平安時代に入りその数は大きく増大し、その範囲も拡大している。発掘調査により遺構が検出されているのは、四釜川左岸の微高地上に位置する石墨遺跡、同右岸の舌状台地に位置する大釜遺跡(6)、小沢川を挟み石墨遺跡の対岸に存在する戸神諏訪遺跡、土塔原遺跡(4)である。

## II 調査の方法と遺跡の概要

### 1 調査の方法

会社側との協議の結果から、掘削工事の行われる水路敷設予定地(3.5m×100m)部分について、重機により耕作土を剥ぎ適宜拡張して調査を進めた。検出された遺構、遺物については任意のポイントを設定して $\frac{1}{50}$ で、全体図は $\frac{1}{200}$ で20cmのコンタを入れて作図を行った。しかしながら本調査区は関越自動車道関連で大規模に調査された石墨遺跡と近接していることや、今後周辺地において開発行為に係る発掘調査が実施される可能性があり、それらとの位置関係を明確にするために全体図は国家座標を入れて作成した。

### 2 遺跡の概要

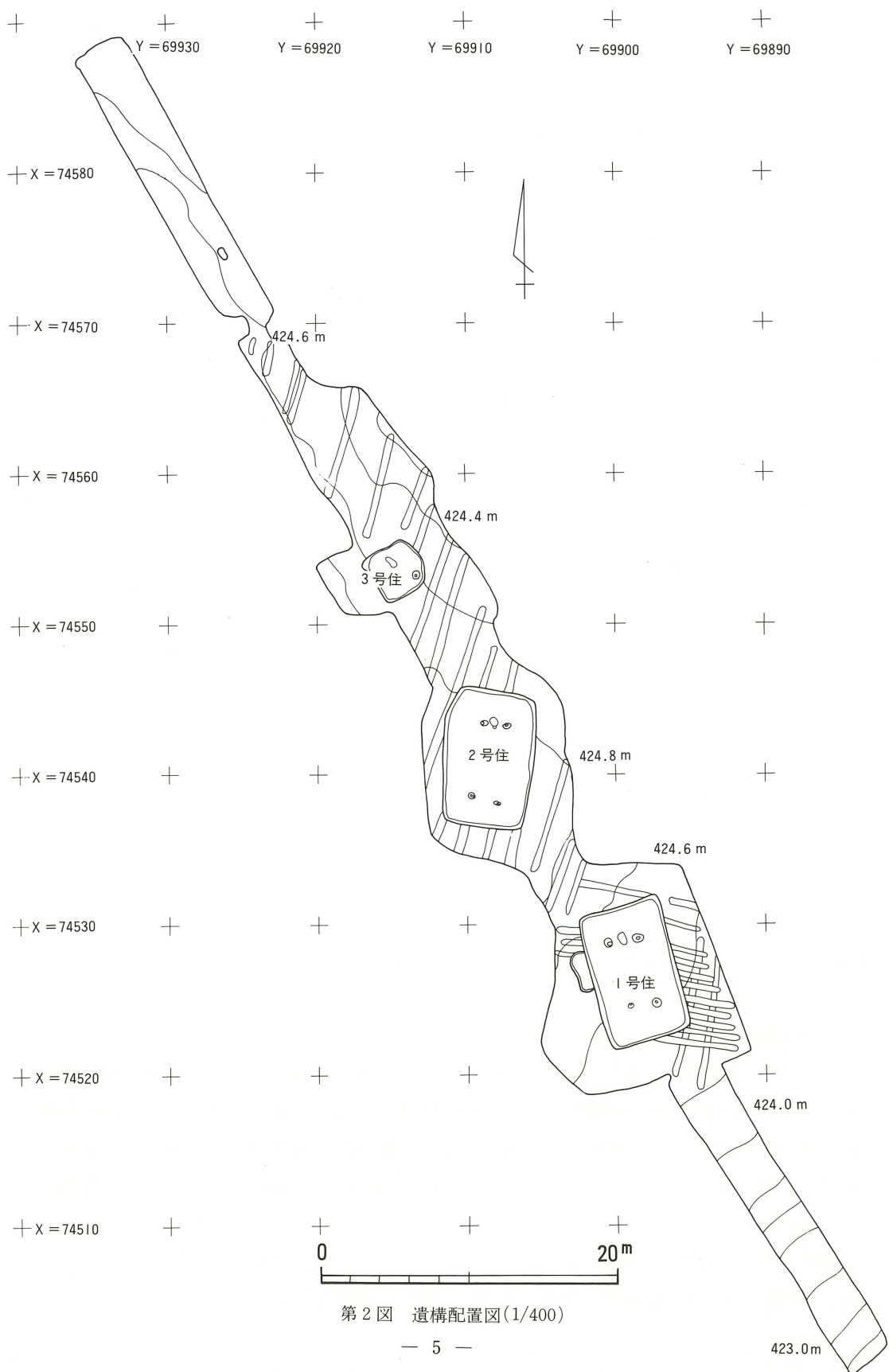
本遺跡からは弥生時代後期後半の住居址 2 軒と古墳時代前期のものと推定される住居址 1 軒が検出されたが、各遺構とも畑のサク状の攪乱が床面付近まで及んでいたため遺存状態は良好ではなかった。出土遺物については、該期の資料が主であるが、周辺に遺構の存在が推定される縄文前期の土器片や平安時代の土器片等も検出されている。

### 3 基本層序

調査区域は現状の地形より過去においては起伏があり、遺構の存在する中央部分は微高地で両端側は沢状の低地となっていたことがうかがわれる。遺構検出部分においては表土下にはすぐにローム漸移層あるいはローム層となっているため、比較的良好な層序の確認できる南側の沢状低地部分を基本の層序とした。

I 層 表土 軽石を含み灰褐色を呈する。

II 層 暗褐色土 上層よりやや固く締まる。



第2図 遺構配置図(1/400)



III層 暗褐色土 浅間B軽石を主体とする。

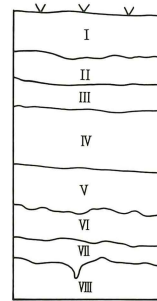
IV層 暗褐色土 榛名二ツ岳軽石を主体とし下部は純層に近い。

V層 黒褐色土 粘性あり。

VI層 暗褐色土

VII層 ローム漸移層

VIII層 ローム層



第3図 遺跡基本層序(1/40)

### III 検出された遺構と遺物

#### 1 住居址

##### 1号住居址

本住居址は調査区のやや南側に位置する。東側が、方形の攪乱を受けていたほか、全体が畑のさくにより攪乱されていたが、規模等については明確にすることができた。形状は長軸9.1m、短軸5.7mの長方形を呈する。

確認面から床面までは8cm～40cmを測り、床面はほぼ平坦で壁周辺を除いて硬くしまっている。柱穴は9本検出されたが、支柱穴は $P_1 \sim P_4$ で、南壁付近の $P_5 \cdot P_6$ は入口施設に関連する柱穴、 $P_7$ については貯蔵穴と推定される。 $P_4$ 北側に位置する浅い皿状のピットは、底面が焼けた状態で検出された。

炉は楕円形を呈する地床炉で支柱穴 $P_1 \cdot P_2$ を結んだラインより外側に位置し、南側に長方形の河原石を使用した枕石1石を配する。

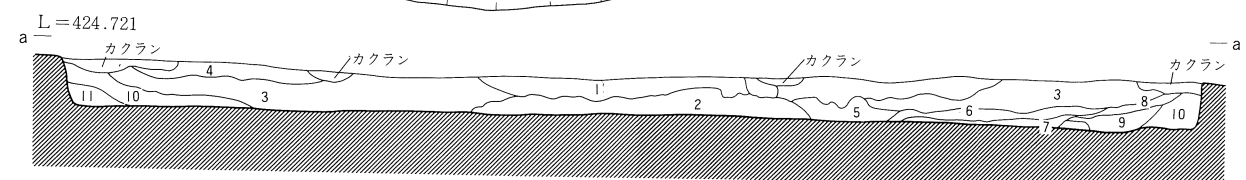
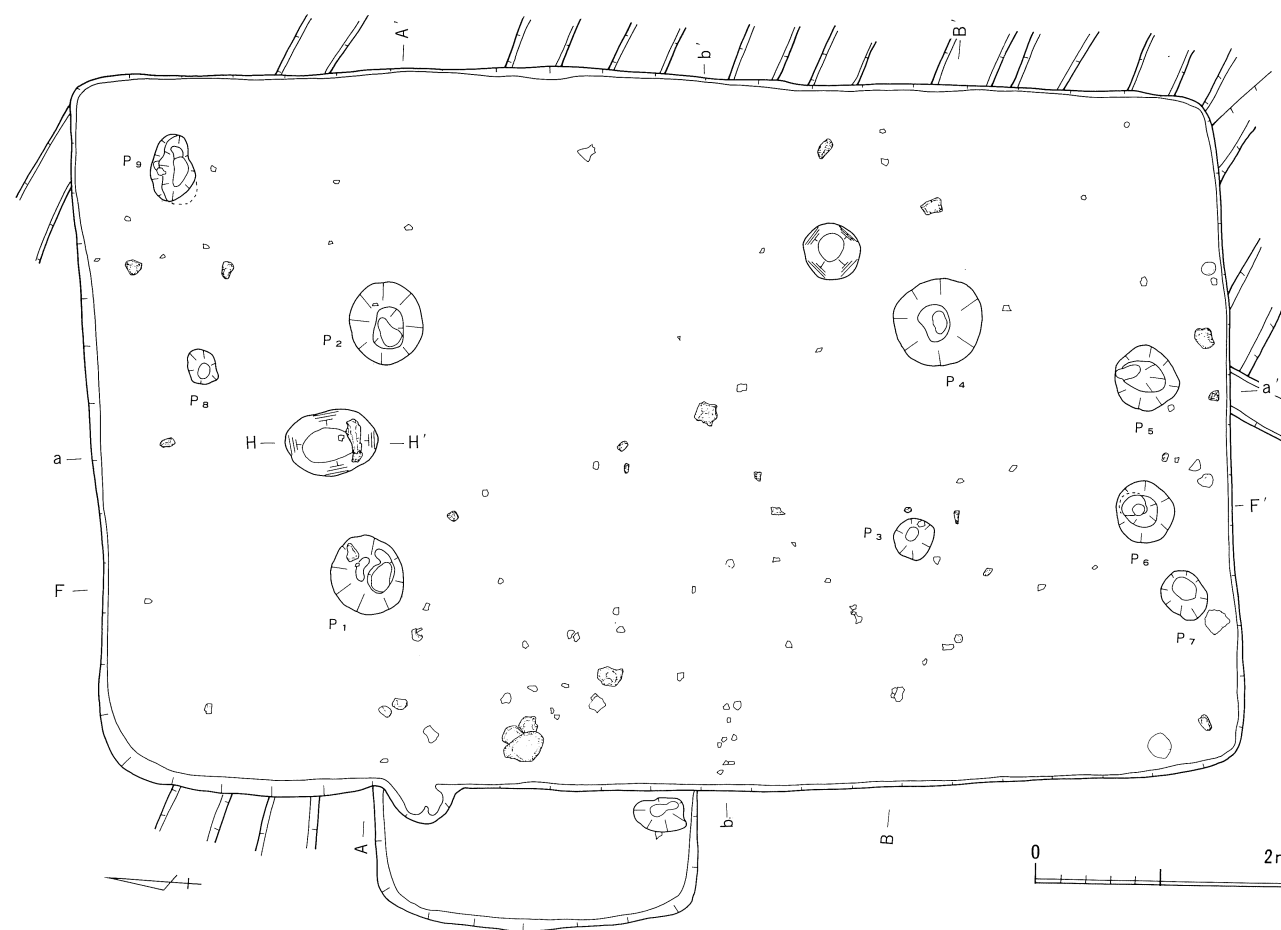
遺物の出土量は、やや少く点在しており床直の資料も数点のみである。

その中で良好な資料は、単孔で口縁部が直立ぎみに立ちあがる甗、やや大型の高坏脚部、台付甕や鉢の破片、また床直で出土した紡錘車等である。

##### 2号住居址

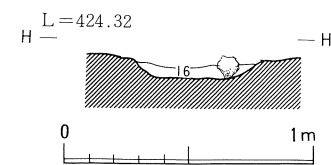
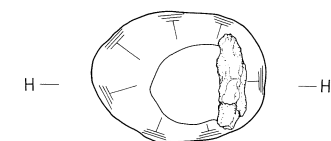
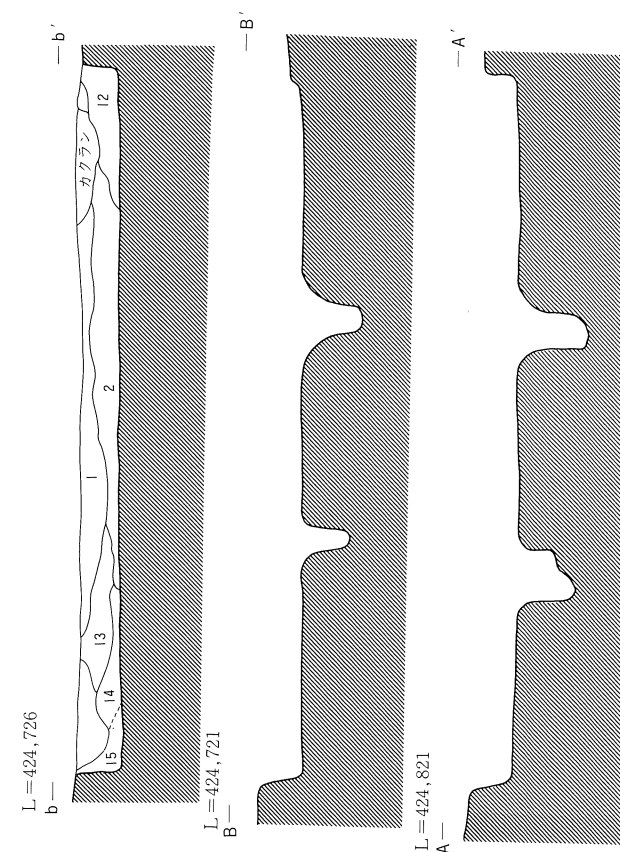
本住居址は調査区のほぼ中央に位置し、1号住と3号住の中間にある。1号住と同様に攪乱されている部分が多かったが規模等については明確にすることができた。形状は長軸9.2m、短軸6mの隅丸長方形を呈する。確認面から床面までは、20cm～42cmを測り、床面はほぼ平坦で壁際を除いてよく踏み固められていた。また、西壁・北壁及び東壁部分には壁に沿って浅い周溝が廻ることが確認された。

柱穴は24本確認されており支柱穴は $P_1 \sim P_4$ である。 $P_5 \cdot P_6$ は柱痕が南壁の方向に傾斜しており、入口施設の柱穴、壁際及び中央の小柱穴は支柱穴と推定される。なお $P_4$ 北側の柱穴について



- |    |        |                       |
|----|--------|-----------------------|
| 1層 | 暗褐色土層  | ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。  |
| 2層 | 黒褐色土層  | ローム粒、ロームブロックを少量含む。    |
| 3層 | 暗黄褐色土層 | ローム粒、ロームブロックを多量に含む。   |
| 4層 | 暗黄褐色土層 | ローム多、ロームブロック(小)を多く含む。 |
| 5層 | 暗褐色土層  | ローム粒子を多く含む。           |
| 6層 | 黄褐色土層  | ロームブロックを最大に多く含む。      |
| 7層 | 暗褐色土層  | やや粘性ある土、ローム粒子をやや含む。   |
| 8層 | 暗黄褐色土層 | ロームブロックを少量含む。         |
| 9層 | 暗黄褐色土層 | ロームブロックを多く含む。         |

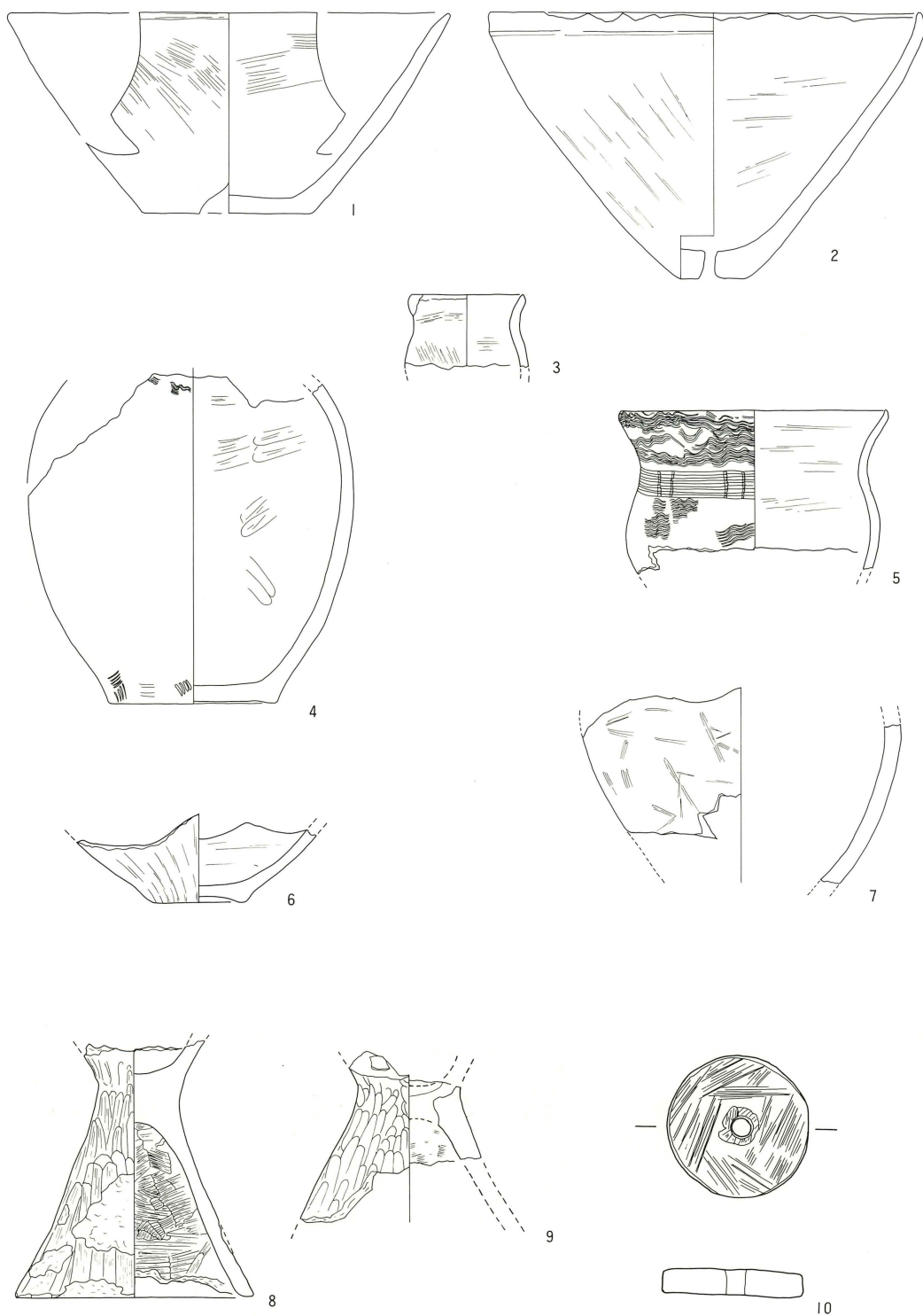
- |     |        |                                |
|-----|--------|--------------------------------|
| 10層 | 暗黄褐色土層 | ローム粒を多量に含む。(ブロック少い)            |
| 11層 | 暗黄褐色土層 | 10層に似ているが、ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。 |
| 12層 | 暗黄褐色土層 | ローム粒を多量に含む。(ブロックは少い)           |
| 13層 | 暗褐色土層  | ローム粒を多く、ロームブロックも含む。            |
| 14層 | 暗黄褐色土層 | ローム粒子を多量に含む。                   |
| 15層 | 暗黄褐色土層 | 14層に似ているがやや黒い。                 |
| 16層 | 暗褐色土層  | ローム粒、ロームブロック多、焼土少量含む。          |



第4図 1号住居址(1/60)

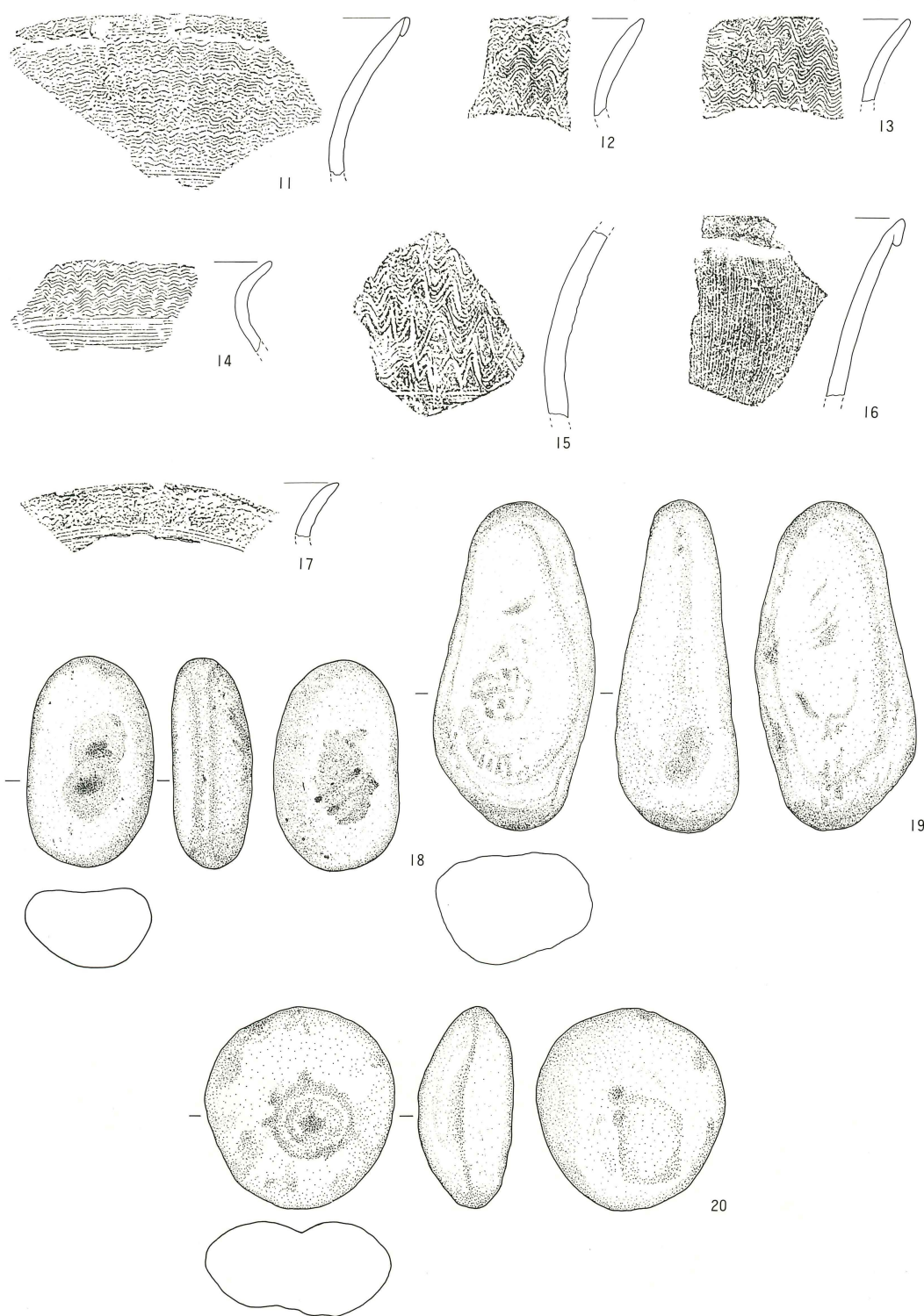




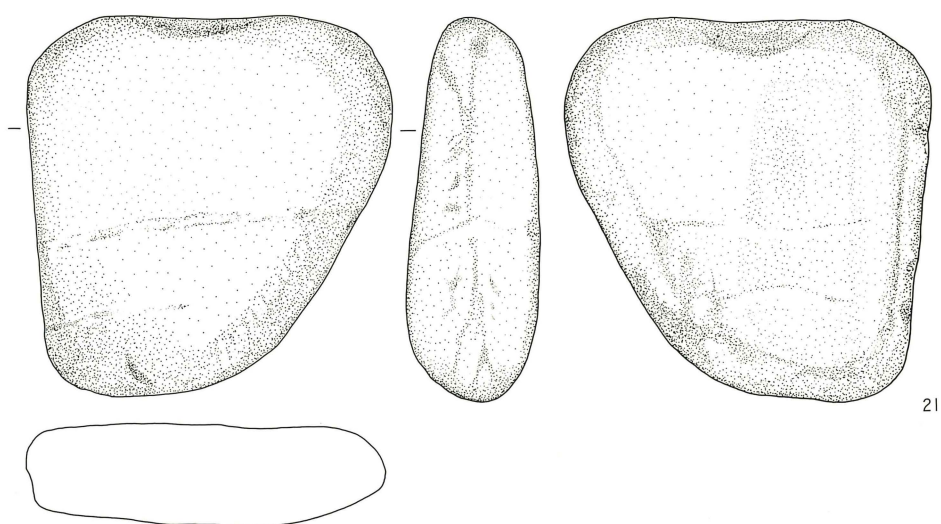


第5図 1号住居址出土遺物〔1〕(1/3・10は1/2)

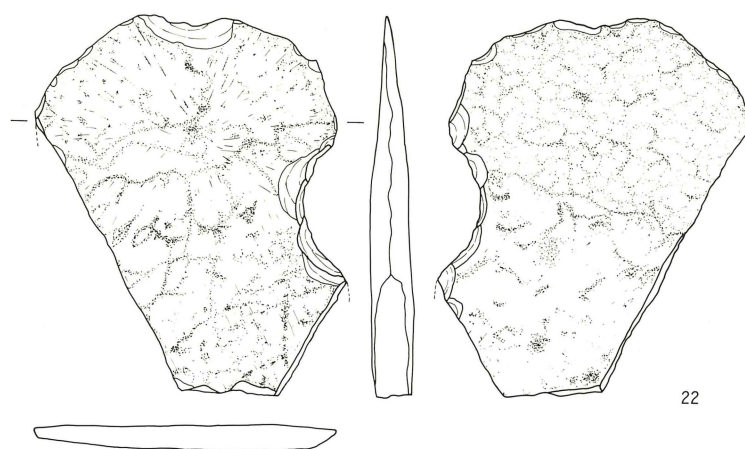




第6図 1号住居址出土遺物〔2〕(1/3)



21



22

第7図 1号住居址出土遺物〔3〕(1/3)

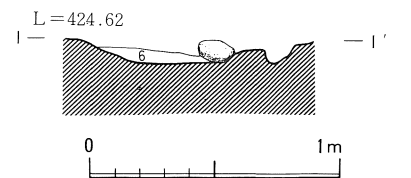
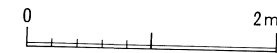
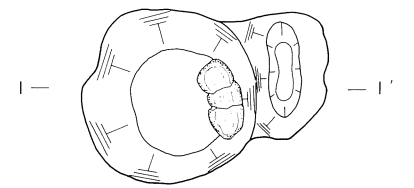
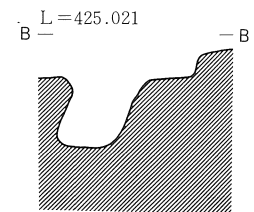
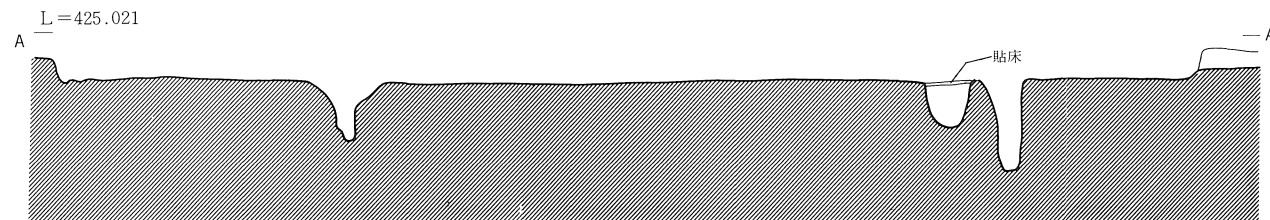
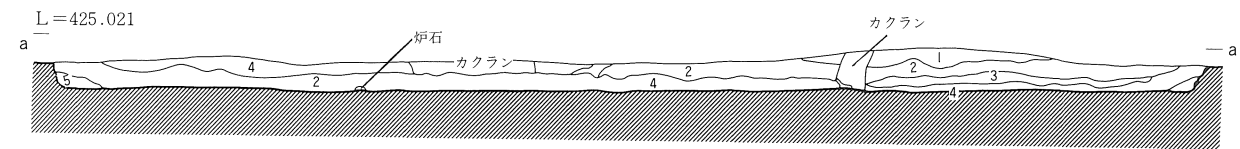
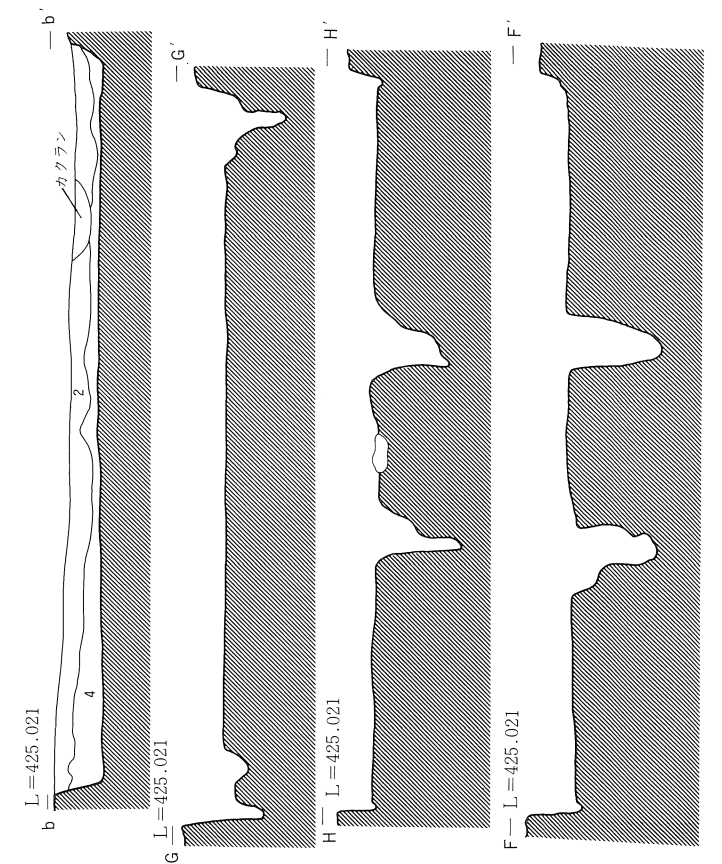
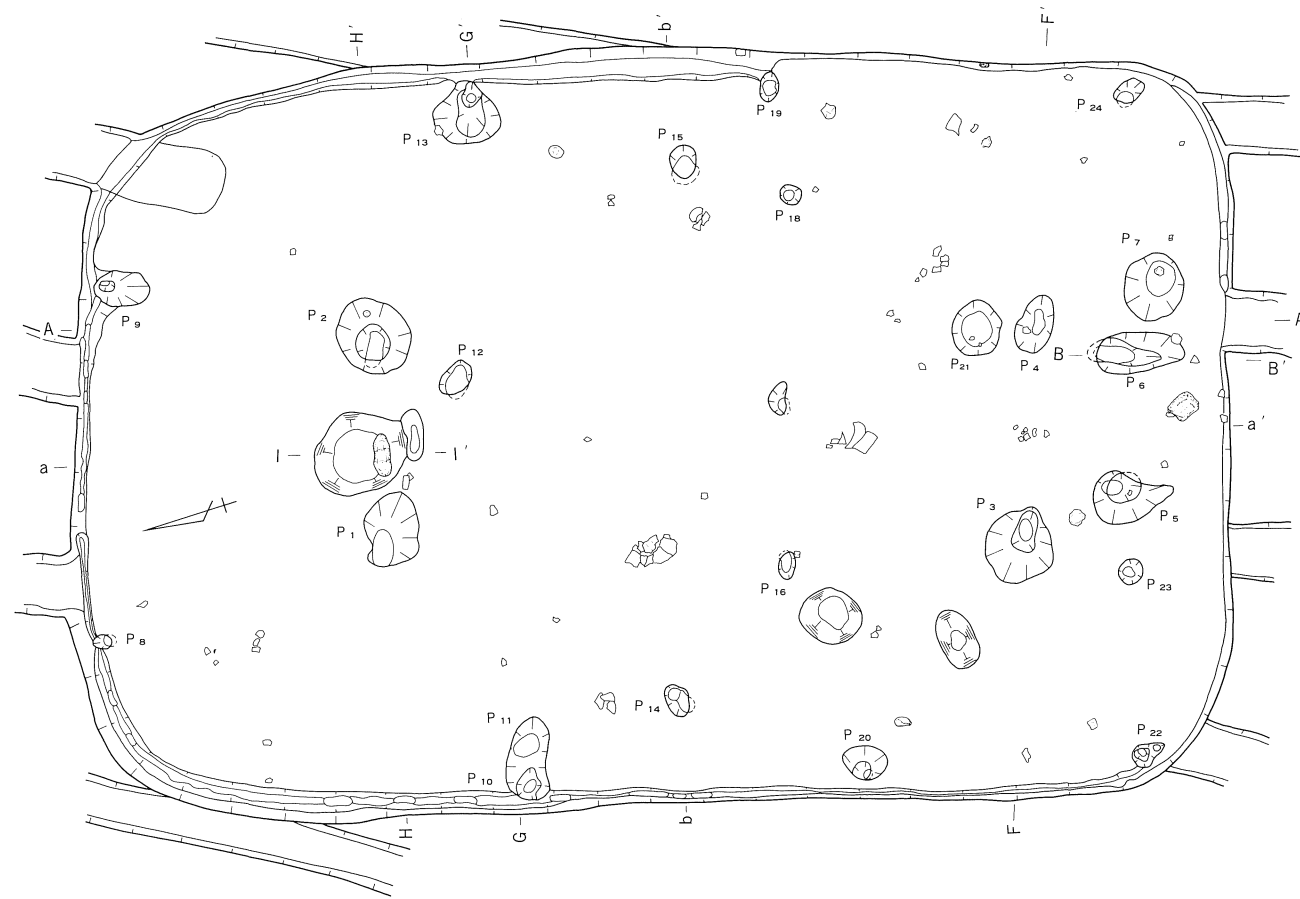
表1 1号住居址出土遺物観察表

図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図5-1 写6-1	鉢	覆土 1/4	(口20.0) 高 9.0	細砂粒含。堅緻。淡褐色。内外面刷毛整形後外面篋磨き。	
図5-2 写6-2	甗	床面 3/4	底 2.8 高 11.9	微砂粒やや多く含。堅緻。淡褐色。内面横位外面縦位の篋磨き。口縁部横撫で	孔径0.8cm
図5-3 写9-(2)	小型 甗	覆土・口縁 から胴上部	(口 5.0) (頸 4.8)	砂粒含。堅緻。黒褐色。内外面横方向の篋磨き。	ミニチュア
図5-4 写6-3	甗	覆土・胴部 から底部	(胴14.7) (底 7.6)	砂粒含。堅緻。暗黄褐色。内外面横位の篋磨き。	肩部に櫛描波状文。



図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図5-5 写6-4	台付 甕	覆土・口縁 から胴上部	(口12.0) (頸10.2)	砂粒を多く含む。外面やや軟弱。黒褐色。内面 横方向筥磨き。	口縁に9条1単位の櫛描波状 文。頸部に2連止めの簾状文。
図5-6 写6-5	甕	覆土 底部	底 4.0	細砂粒多く含。堅緻。黄褐色。外面縦位の筥磨 き。	
図5-7 写6-6	甕	覆土 胴部	(胴15.0)	砂粒を少量含。堅緻。外面褐色。内面黒褐色。 外面縦位、内面横位の筥磨き。	
図5-8 写6-7	高坏	覆土 脚部	(底10.7)	細砂粒を少量含。堅緻。黒褐色。外面縦位の筥 磨き。内面横位の刷毛整形。	
図5-9 写6-8	高坏	覆土 頸部から脚部	頸 4.6	砂粒含。やや軟弱。淡褐色。外面縦位の筥磨き。 内面斜位の刷毛整形	
図5-10 写9-(2)	土製 紡錘 車	床面 完形	直径4.2 厚 0.8	微砂粒含。堅緻。淡褐色。全面丁寧な筥撫。 穿孔は焼成前。	孔径0.7cm。重量17g
図6-11 写9-(2)	甕	覆土 口縁部		細砂粒含。堅緻。外面暗褐色。内面黄褐色。内 面横位の筥磨き。	口縁部に9条1単位の櫛描波状 文。頸部に簾状文。
図6-12 写9-(2)	甕	覆土 口縁部		微細砂粒含。堅緻。暗茶褐色。内面横方向筥磨 き。	口縁部に7条1単位の櫛描波状 文。
図6-13 写9-(2)	甕	覆土 口縁部		微細粒含。堅緻。外面褐色。内面黒褐色。内面 横位筥磨き。	口縁部7条1単位の櫛描波状 文。頸部2連止め簾状文。
図6-14 写9-(2)	台付 甕	覆土 口縁から頸部		微砂粒含。黄褐色。内面横方向筥磨き。	口縁部10条1単位の櫛描波状 文。頸部2連止め簾状文。
図6-15 写9-(2)	甕	覆土 口縁下部		微細粒少量含。堅緻。外面暗褐色。内面淡褐色。	口縁部に櫛描波状文。 頸部一簾状文。
図6-16 写9-(2)	壺	覆土 口縁部		微細粒含。やや軟弱。明褐色。外面縦、内面横 位の刷毛整形。	
図6-17 写9-(2)	台付甕 ?	覆土 口縁破片		微砂粒含。外面軟弱。暗褐色。内面横位の筥磨 き。	口縁一櫛描波状文。 頸部一簾状文。

図番号 写真番号	名 称	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	重 量 (g)	特 徴
図6-18 写10-(1)	凹 石 (磨 石)	床面 完形	長 9.5 幅 5.7	240	長楕円形。片面に擦痕敲打による凹み有。凝灰岩
図6-19 写10-(1)	敲 石	覆土 完形	長 14.8 幅 7	700	棒状。片面、両端に打痕有。安山岩
図6-20 写10-(1)	凹 石	覆土 完形	幅 9.1 厚 4.3	390	円形。片面に敲打による凹み有。安山岩
図7-21 写10-(1)	敲 台 石	床面 完形	長 15.1 幅 14.6	1,830	台形で偏平。両面に使用痕有。輝緑岩
図7-22 写10-(1)	打製石斧	覆土 3/4	幅 12.1 厚 1.6	360	分銅型。偏平。安山岩



- |          |                    |         |                   |
|----------|--------------------|---------|-------------------|
| 1層 暗褐色土  | ローム粒含む。            | 4層 暗褐色土 | ローム粒子を多く含む。       |
| 2層 暗黄褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多く含む。 | 5層 暗褐色土 | ローム粒少量含む。         |
| 3層 黒褐色土  | やや黒味を帯び、ローム粒少量含む。  | 6層 暗褐色土 | ローム粒少量、焼土粒やや多く含む。 |

第8図 2号住居址(1/60)



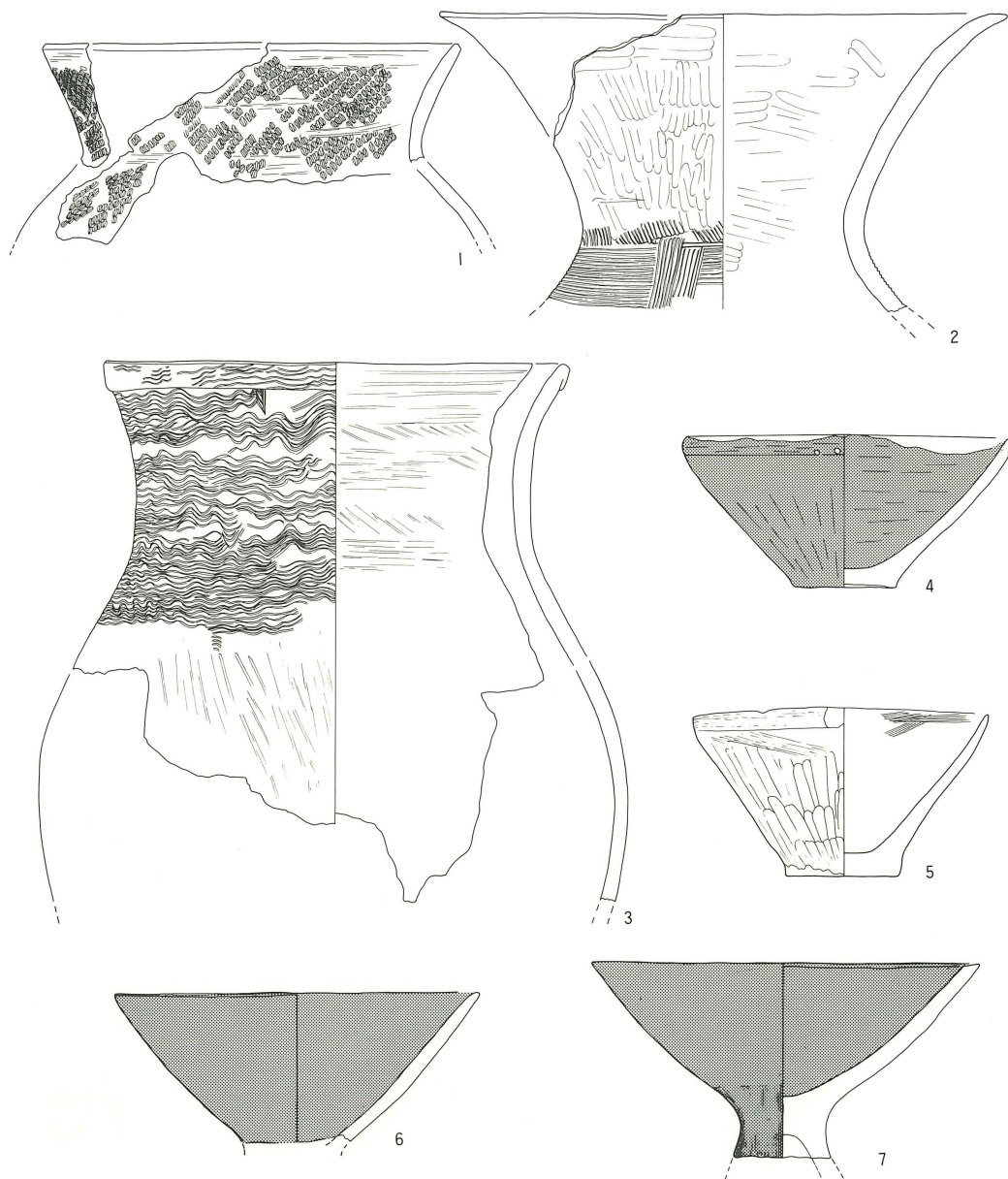


はロームで貼り床状に蓋をされており住居廃絶時には開口していなかったことが判明した。またP<sub>6</sub>東側のピットは貯蔵穴に相当する。住居内西側に検出された皿状のピットは、いずれも底面に焼土を確認した。

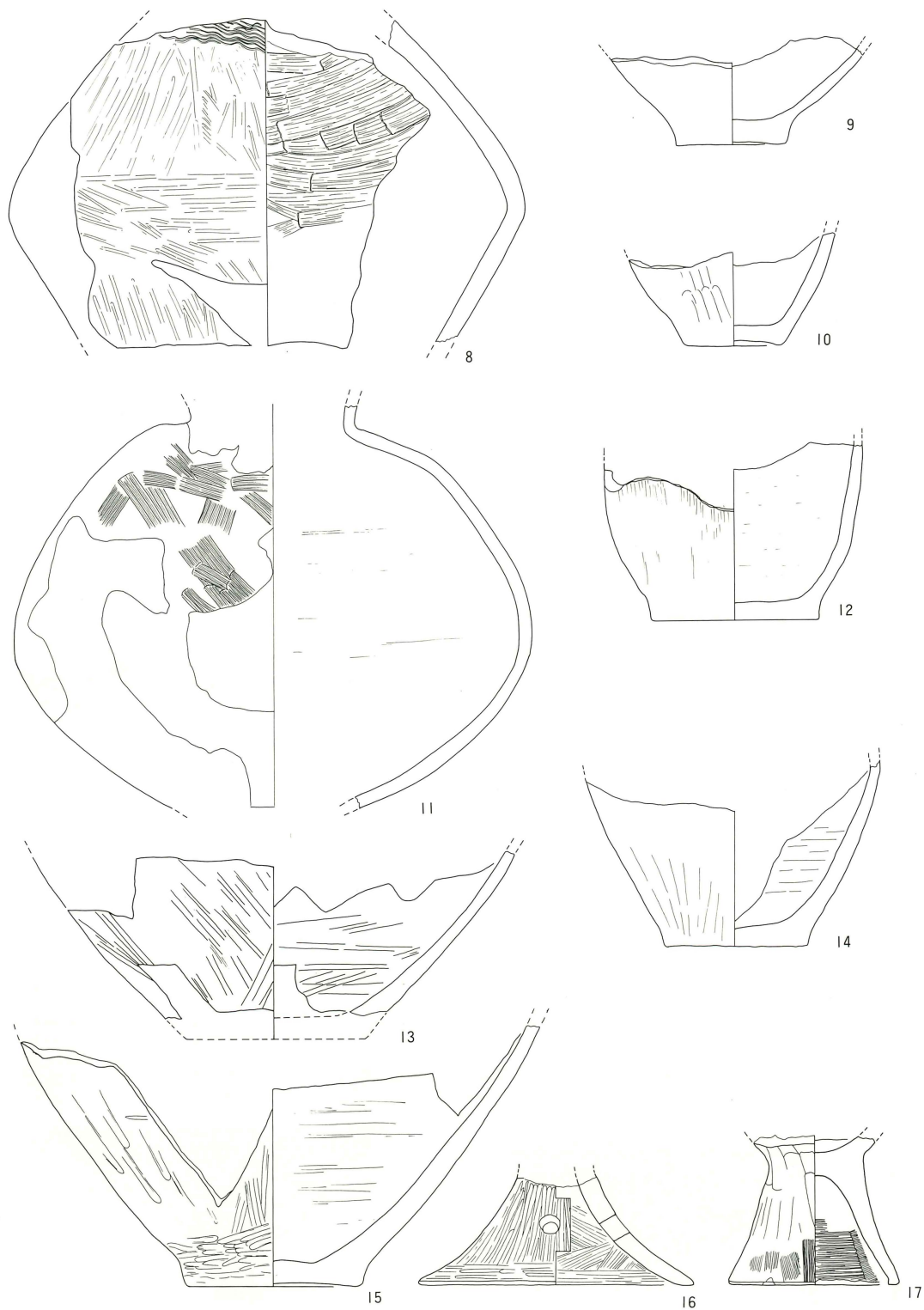
炉は円形を呈する地床炉で、作り替えがなされており主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間からやや外側に移行した痕跡が認められた。また南側には偏平で楕円形の河原石を利用した枕石が1石配される。

遺物は出土量は少ないものの南半分側にやや集中する傾向がみられた。

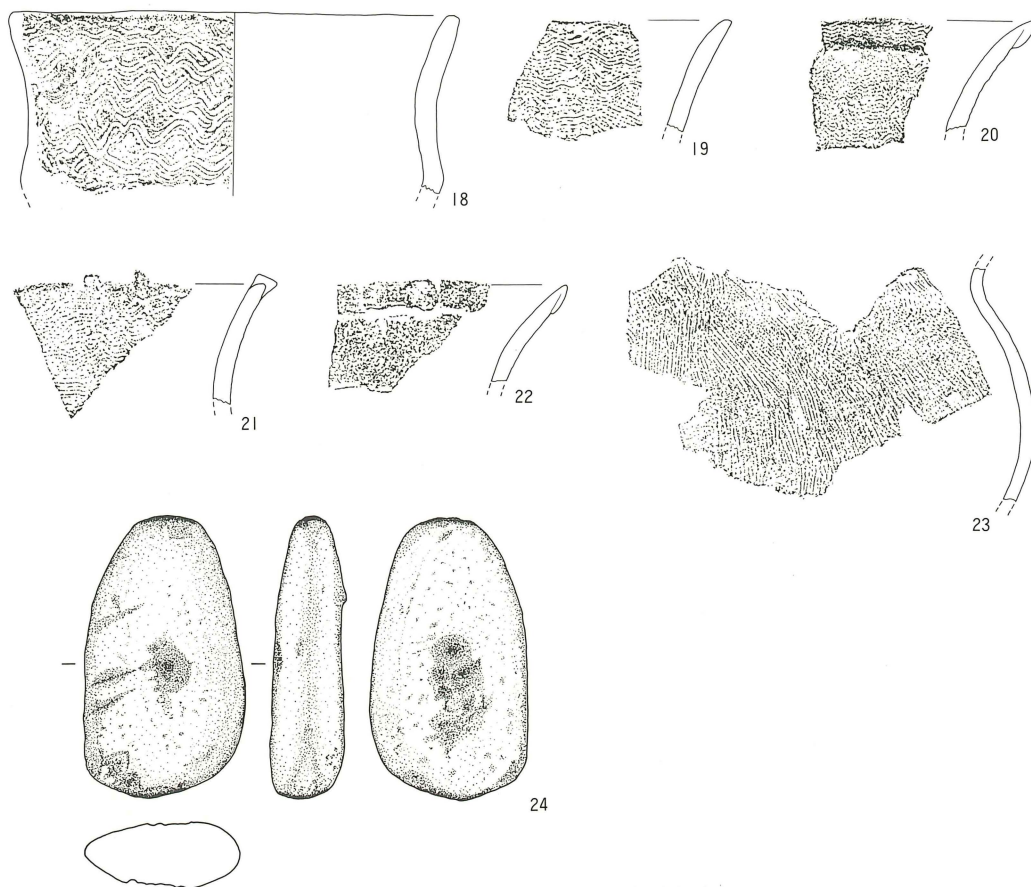
良好な資料としては、ほぼ完形に近い鉢が2点、壺、甕、高坏の破片等がある。



第9図 2号住居址出土遺物〔1〕(1/3)



第10図 2号住居址出土遺物〔2〕(1/3)



第11図 2号住居址出土遺物〔3〕(1/3)

表2 2号住居址出土遺物観察表

図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図9-1 写7-1	甕	覆土 口縁から頸部	(口17.4) (頸14.0)	砂粒含。堅緻。明褐色。内面篋撫での後口縁部横撫で。器面調整後縄文を施す。	縄文（前々段反撚）L { R { R R { R
図9-2 写7-2	甕	床面 口縁から頸部	(口23.4) (頸10.2)	微砂粒含。堅緻。内面褐色。外面赤褐色。口縁外面縦位の篋磨き。	頸部一10条1単位の簾状文の後櫛描懸垂文。
図9-3 写7-3	甕	住居南壁際 口縁から胴部	口 19.2 頸 16.2 胴 24.3	微砂粒含。堅緻。外面黒褐色。内面褐色。外面胴部縦位篋磨き。内面横位の篋磨き。	口縁部に7条1単位の櫛描波状文。
図9-4 写7-4	鉢	床直 ほぼ完形	口 13.3 高 6.3 底 4.2	砂粒含。やや軟弱。内外面赤彩。外面口縁横方向篋磨き。胴部縦方向、内面横方向篋磨き。	口縁部に二個対の穿孔有。
図9-5 写7-5	鉢	床直 ほぼ完形	口 12.2 高 6.9 底 4.6	微砂粒含。堅緻。黄褐色。外面口縁部横方向篋磨き。胴部縦方向篋磨き。内面横方向篋磨き。	
図9-6 写7-6	高坏	覆土 坏部 1/2	(口15.0)	微砂粒含。堅緻。内外面赤彩。内外面とも横方向の細い篋磨き。	



図 番 号 写真番号	器 種	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文 様・その他
図9-7 写7-7	高坏	覆 土 坏部～頸部	(口16 ) 頸 3.5	白色微粒子含。堅緻。内外面赤彩。坏部内外面とも横位の篋磨き。頸部縦位篋磨き。	
図10-8 写7-8	壺	覆 土 胴 部 ⅓	(胴24 )	細砂含。堅緻。外面黒褐色内面灰褐色。胴部最大径部分横位、他は縦位の篋磨き。	胴上部櫛描波状文。
図10-9 写8-9	甕	床 直 胴下部～底部	底 5.2	砂粒含。堅緻。黄褐色。底部黒色。内横位、外縦位の篋磨き。	
図10-10	小型 甕	ピ ッ ト 内 胴下部～底部	底 4.6	砂粒含。やや軟弱。外面黒褐色。内面褐色。外面縦位の篋磨き。	
図10-11 写8-10	壺	覆 土 胴 部 ⅓	胴 23.4	砂粒含。やや軟弱。黄褐色。胴部縦、横、斜め方向に刷毛調整。	
図10-12	甕	覆 土 胴部～底部	底 7.6	砂粒含。やや軟弱。内面褐色。外面暗褐色。外面縦位の細い篋磨き。内面不明。	
図10-13	甕	覆 土 胴 下 部		砂粒含。堅緻。外面淡褐色。外面縦位の篋撫で。内面横位の篋撫で。	
図10-14 写8-12	甕	床 面 胴部～底部	底 6.8	微砂粒含。堅緻。褐色。外面縦位、内面横位の篋磨き。	
図10-15	壺	床 面 胴下部～底部	底 8.0	砂粒含。堅緻。茶褐色。外面縦位の篋磨き。内面横位の篋撫で。	
図10-16 写8-11	器台	覆 土 脚 部 ⅓	底 12.6	砂粒含。堅緻。黄褐色。外面縦位の篋磨き。端部横位の篋磨き。内面横位の刷毛整形	
図10-17 写8-13	台付 甕	床 面 脚 部	頸 4.4 底 7.9	細砂含。やや軟。茶褐色。外面縦位、内面横位に刷毛整形	
図11-18 写9-(3)	甕	覆 土 口 縁		砂粒含。やや軟弱。内外面暗褐色。内面横撫で	5条1単位櫛描波状文。
図11-19 写9-(3)	甕	覆 土 口 縁		砂粒含。やや軟弱。外面黒褐色。内面褐色。内面横位の篋磨き。	櫛描波状文。
図11-20 写9-(3)	甕	覆 土 口 縁		砂粒含。やや軟弱。内外面黄褐色。内面横位の篋磨き。	櫛描波状文。折返し口縁
図11-21 写9-(3)	甕	覆 土 口 縁		砂粒含。堅緻。内外面淡褐色。内面横位の篋磨き。	櫛描波状文。口唇部に一對のボタン状貼付文。
図11-22 写9-(3)	壺	覆 土 口 縁		砂粒含。堅緻。黄土色。内面横撫で	折返し口縁
図11-23 写9-(3)	甕	覆 土 胴 部		砂粒含。やや軟弱。暗褐色。外面胴部斜方向刷毛整形。	

図 番 号 写真番号	名 称	出土位置 遺存状況	法 量 (cm)	重 量 (g)	特 徴
図11-24 写11-左 上	凹 石	完 形	長 11.0 幅 6.1	275	楕円。片面に集合打痕を認める。 上下縁辺にも打痕を有す。厚2.9cm 安山岩

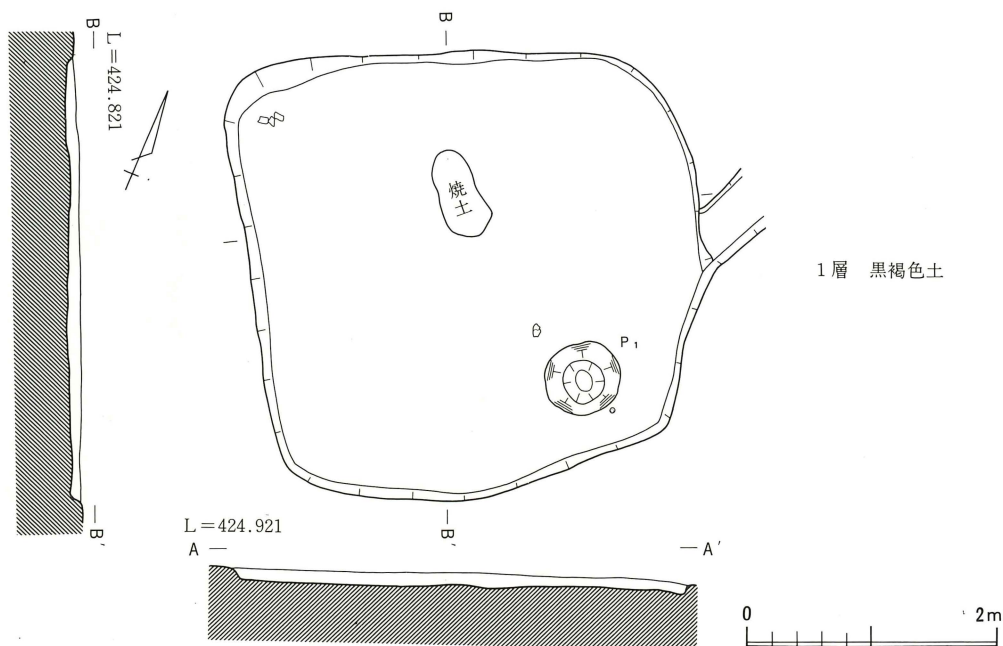
### 3号住居址

本住居址は調査区の中央やや北寄りに位置する。乱れたローム漸移層に掘り込まれていたため壁等には若干不明瞭さが残るものの形状は軸3.6mのやや歪んだ隅丸方形を呈する。

確認面から床面までは3cm～10cmを測る。床面は軟弱でピットも1つ検出したのみである。

炉は不整楕円形の若干の焼土塊を検出したのみで掘り方等は明確にし得なかった。

遺物の出土量は僅かであり器形を知ることのできる良好な資料は器台のみである。



第12図 3号住居址(1/60)



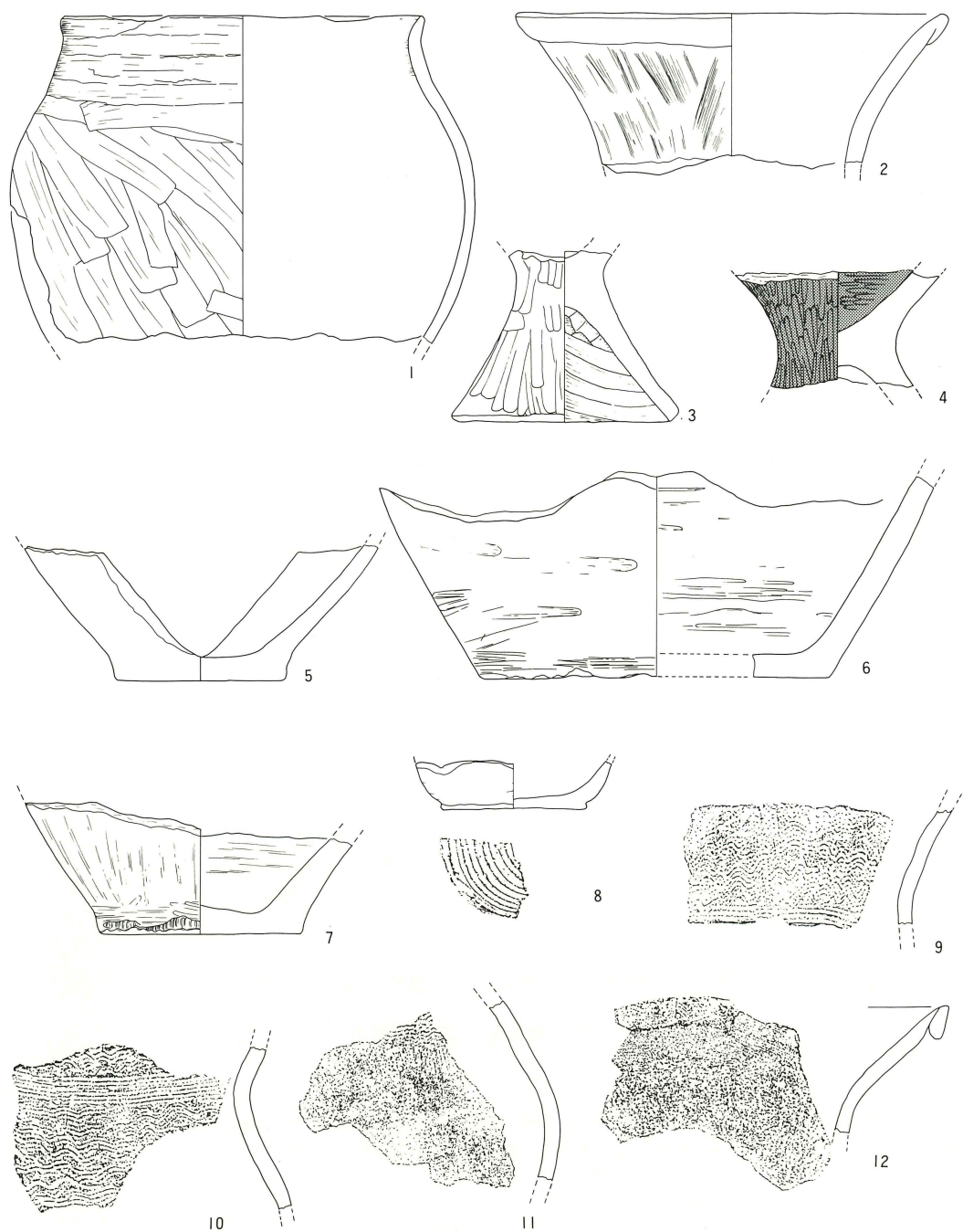
第13図 3号住居址出土遺物(1/3)

表3 3号住居址出土遺物観察表

図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図13-1 写8-14	器台	覆土 台部ほぼ完形 脚部 1/2	口 8.6 高 8.4 頸 3.2 底 12.4	微砂粒含。堅緻。黄褐色。台部内面横位の篋磨き。口縁部外面横撫で。脚部外面縦位の篋磨き。内面横位の刷毛整形。	脚部中位に3孔有。
図13-2	甕	覆土 頸部		砂粒含。堅緻。外面灰褐色。内面黒褐色。	頸部8条1単位の簾状文 上下に櫛描波状文。

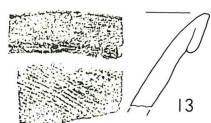
## 2 遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は多くが調査区北側の沢状低地に落ち込む部分から検出された。住居址と同時代の資料が多かったが、縄文時代・古墳時代以降の資料も検出されている。



第14図 遺構外出土遺物〔1〕(1/3)

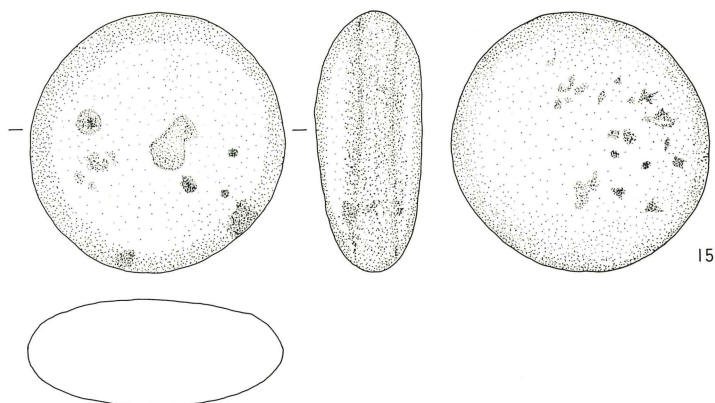




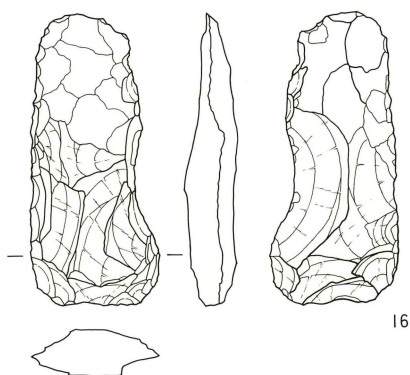
13



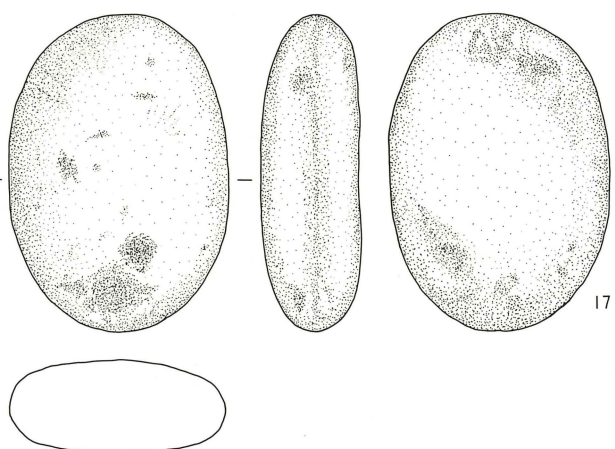
14



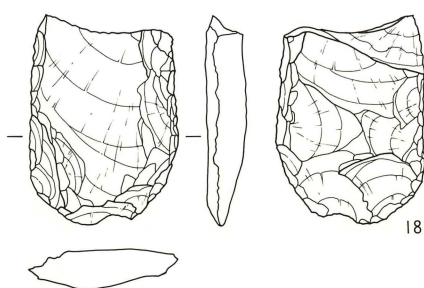
15



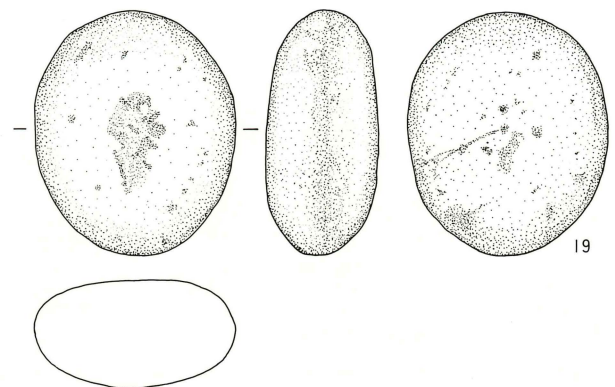
16



17



18



19

第15図 遺構外出土遺物〔2〕(1/3)

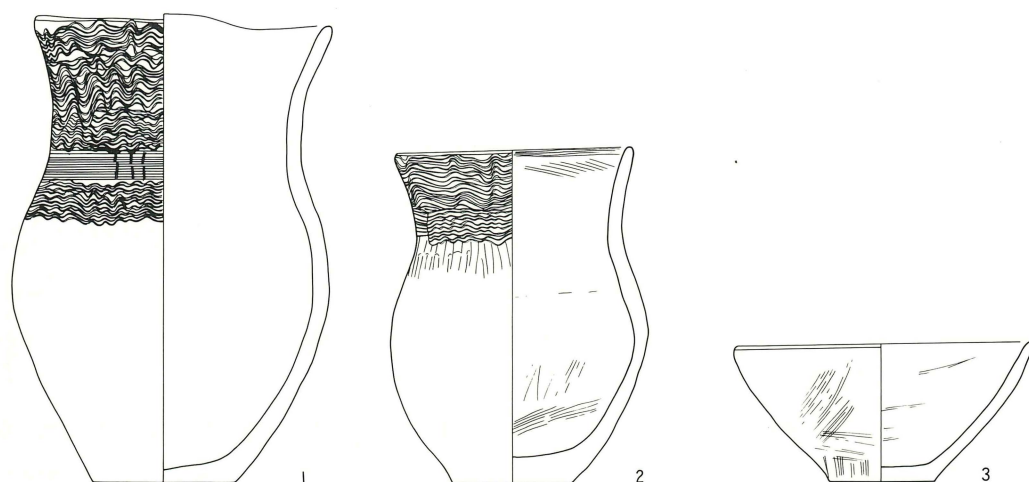
表4 遺構外遺物観察表

図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図14-1 写8-1	甕 (土師)	1号住横攪乱 口縁～胴部 1/2	(口13.8)	細砂粒やや多く含。堅緻。茶褐色。口縁部横撫で。胴部斜位の篋撫で。	
図14-2 写10-(2)	壺	北側沢状低地 口縁 1/2	(口19)	砂粒含。やや軟弱。内外面黄褐色。内面横位篋磨き。外面縦位刷毛整形後縦位の篋磨き。	折返し口縁
図14-3 写8-2	台付 甕	北側沢状低地 脚部	頸 3.7 底 9.5	砂粒含。淡褐色。外面縦位刷毛整形。内面横位刷毛整形。	
図14-4	高坏	表土部 頸部	頸 5.3	微砂粒含。堅緻。外面、坏内部赤彩。外面縦位の篋磨き。	
図14-5	甕	北側沢状低地 胴下部～底部	(底 7.4)	砂粒含。堅緻。内面黄褐色。外面暗褐色。内面横位の撫で。	
図14-6	甕 (須恵)	表土部 胴下部～底部	(底15.4)	細砂、細礫含。堅緻。青灰色。内面横位の撫で。	
図14-7	甕	北側沢状低地 胴下部～底部	底 9	砂粒含。堅緻。淡褐色。外面胴部縦位の磨き。内面横位篋磨き。	
図14-8 写10-(2)	坏 (須恵)	北側沢状低地 底部		砂粒含。堅緻。灰色。外面クロロ痕有。底部回転糸切痕有り。	
図14-9 写10-(2)	甕	北側沢状低地 口縁		微砂粒少量含。堅緻。外面暗褐色。内面明褐色。内面は横位篋磨き。	頸部に2連止め簾状文。 櫛描波状文。
図14-10 写10-(2)	甕	北側沢状低地 頸部～胴上部		砂粒含。堅緻。内面黄褐色。外面茶褐色。内面横位篋撫で。	口縁と胴上部櫛描波状文。 頸部8条1単位2連止簾状文
図14-11 写10-(2)	甕	北側沢状低地 胴上部		微砂粒含。堅緻。内面黄褐色。外面黒褐色。外面縦位の刷毛整形。下部横位の篋磨き。	櫛描波状文。
図14-12 写10-(2)	壺	表採 口縁		砂粒含。やや軟弱。内外面黄褐色。外面上部横位刷毛整形後篋撫で。内面横位篋撫で。	折返し口縁上に櫛描波状文。
図15-13 写10-(2)	壺	北側沢状低地 口縁		微砂粒含。やや軟弱。内面淡褐色。外面灰褐色。内外面刷毛整形後内面及び折返し部横撫で。	折返し口縁
図15-14 写10-(2)	壺	表採 口縁		砂粒含。やや軟弱。外面黄褐色。内面黒褐色。外面縦位の撫で。	折返し口縁(縦方向刻み目)

図番号 写真番号	名称	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	重量 (g)	特徴
図15-15 写11	磨石	表採 完形	長 10.2 幅 10.1	660	円形。片面に擦痕有。玢岩
図15-16 写11	打製石斧	表採 完形	長 11.6 幅 5.1	120	短冊形。厚1.9cm 安山岩
図15-17 写11	磨石	表採 完形	長 12.6 幅 8.7	675	楕円形。片面に擦痕有。厚3.9cm 石英安山岩
図15-18 写11	打製石斧	表採 基部欠損	長 8.3 幅 5.8	95	短冊形。厚1.5cm 安山岩
図15-19 写11	磨石	表採 完形	長 9.6 幅 8.0	490	楕円形。両面に擦痕有。厚4.3cm 石英安山岩

### 3 その他

調査区北西端部に近接した木村忠男氏所有の畑から、農作業中に発見された良好な樽式土器の一括資料があるので、参考資料として報告したい。これらの土器は、出土状況から判断すると住居址内遺物であると推定され、その住居址は、出土土器の特徴から本遺跡の1・2号住とほぼ同時期の遺構で、同一の集落を構成していたと考えられる。



第16図 参考資料(1/3)木村忠男氏所有畑より出土(一括)

表 5 参考資料遺物観察表

図番号 写真番号	器種	出土位置 遺存状況	法量 (cm)	胎土・焼成・色調・整形の特徴	文様・その他
図 16 写 11	小形 甕	ほぼ完形	口 11.8 胴 13.6 底 5.6 高 18.6	細砂粒やや多く含。堅緻。褐色、一部末褐色。外面胴上部横位。下部縦位、内面横位の篋磨き。	口縁～胴上部に櫛描波状文。頸部 左まわり 3 連止め簾状文11条 1 単位
図 16 写 11	小形 甕	ほぼ完形	口 9.5 胴 10.2 底 4.8 高 13.3	細砂粒やや多く含。やや軟弱。暗褐色。外面縦位内面横位の篋磨き。	口縁部櫛描波状文。
図 16 写 11	鉢	完形	口 11.8 底 4.2 高 5.5	砂粒含。堅緻。淡褐色。内外面横位の篋磨き。	



## IV ま と め

本遺跡は関越自動車道建設に伴い調査された石墨遺跡の約250m北側にあたり、かつ同一微高地上に存在するため石墨遺跡の範囲内に入るとも考えられたが、中間地が未調査のため他の遺跡として取り扱った。

1・2号住は、細部では異なるものの隅丸長方形を呈し4本主柱穴で $P_1 \cdot P_2$ 間付近に枕石を配する地床炉を持ち、炉と反対側に入口施設の柱穴および貯蔵穴状のピットを有することなど（県北西部地区における）弥生時代後期の住居址の典型例と言えよう。しかしながら、いずれの住居址とも面積が約50m<sup>2</sup>と同時期の住居址としては、大型の部類に入る。最近、同時期の資料の増加から、後期後半以降に大型住居址を中核とした数軒の住居址の構成が確認されており、1・2号住ともその中核をなした住居址と考えられる。炉の位置については中央側に位置していたものが時期が下るにつれて、柱穴 $P_1 \cdot P_2$ 間を経て壁側に移行することが指摘されており両住居址とも後期のうちでも新しい時期に該当する要素を持つ。また両住居址とも、本来の炉とは別に、底面が焼けた皿状のピットを検出しており、第2の炉として使用されていたものと考えられるが、その焼け方などから使用頻度はあまり多くなかったと推定される。

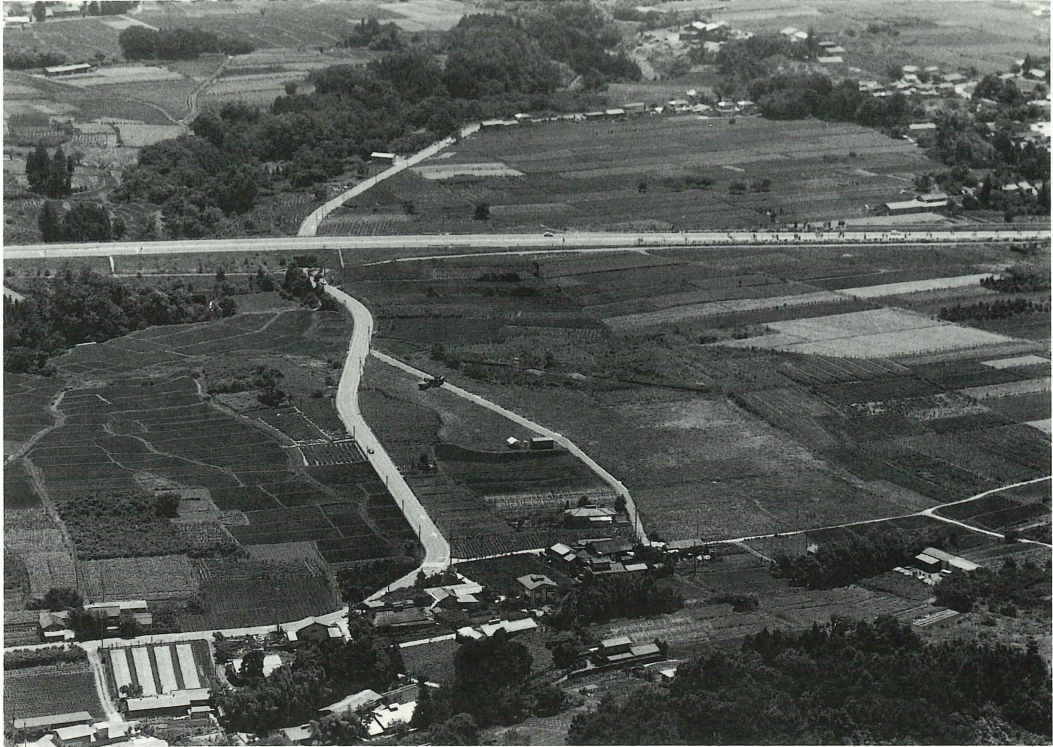
出土遺物については両住居址とも少なかったが、土器については壺、甕、台付甕、甑、鉢、高坏等の破片が検出された。折返し口縁を持つ壺や甕、文様を有する個体は、櫛描波状文や簾状文を有することなどからそれらの資料は樽式土器の新しい段階に相当しよう。また、数点ではあるが縄文を有する土器（図9-7）、表面に刷毛目（櫛目）を残したままの土器（図11-23）が、検出されている。前者は、弥生時代後期に赤城山南麓を中心として分布した赤井戸式土器、後者は、古墳時代前期の土器とすることができよう。

3号住については、掘り込みも浅く、床面も炉も不明瞭さが残ったものの、近接した石墨遺跡においても、同様の特徴をもった住居址が数軒検出されており、また出土遺物の検討からも本住居址は、古墳時代前期の所産であろう。

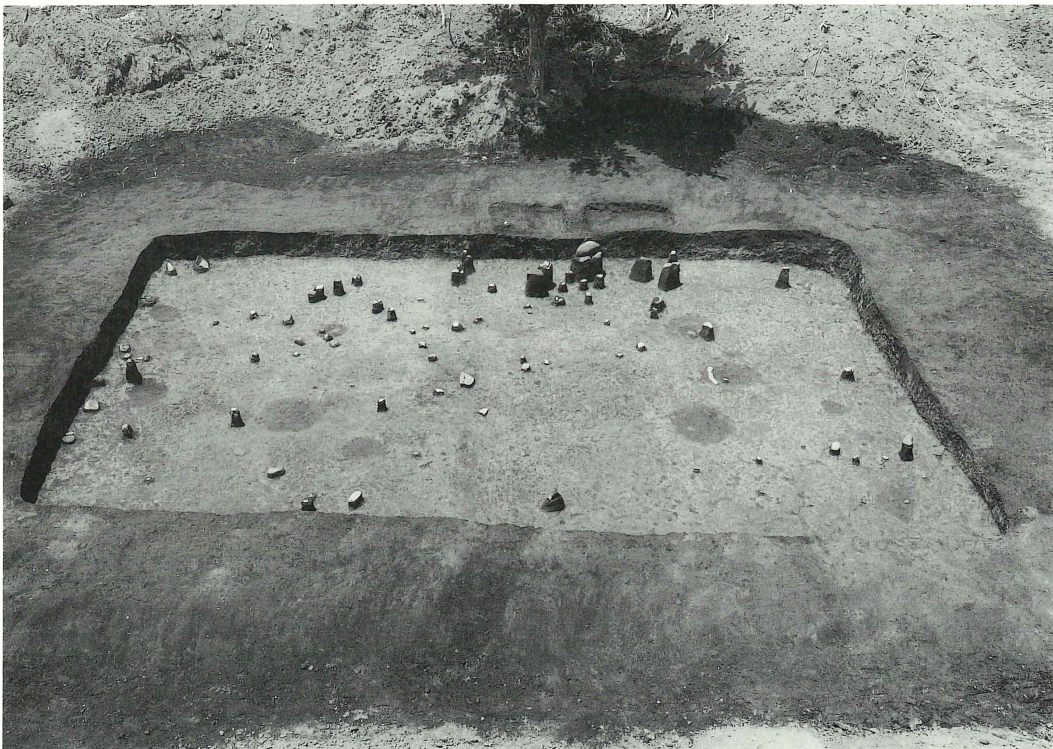
# 写真図版







遺跡遠景（戸神山より望む）



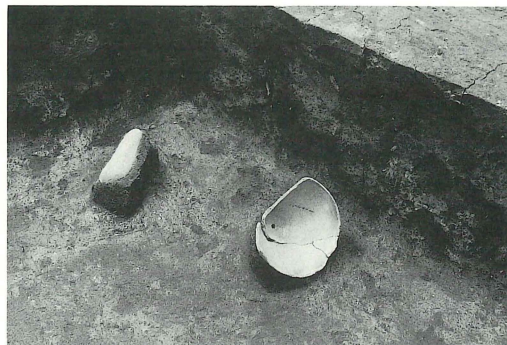
1号住居址遺物出土状態



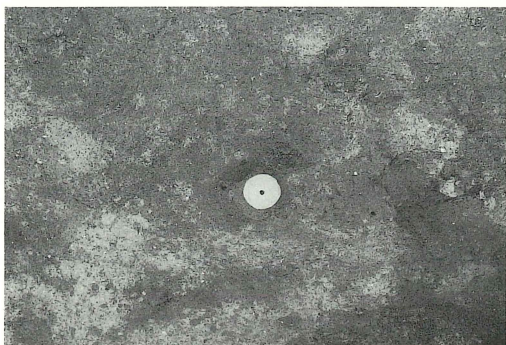
PL-2



1号住遺物出土状態



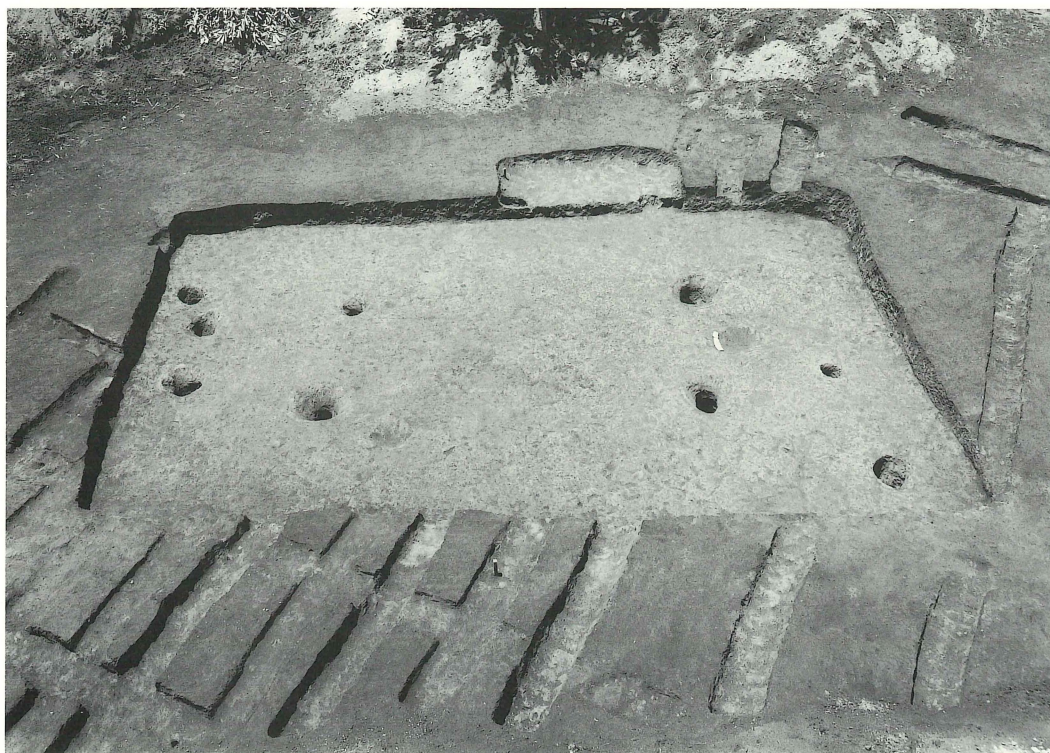
1号住遺物出土状態



1号住遺物出土状態

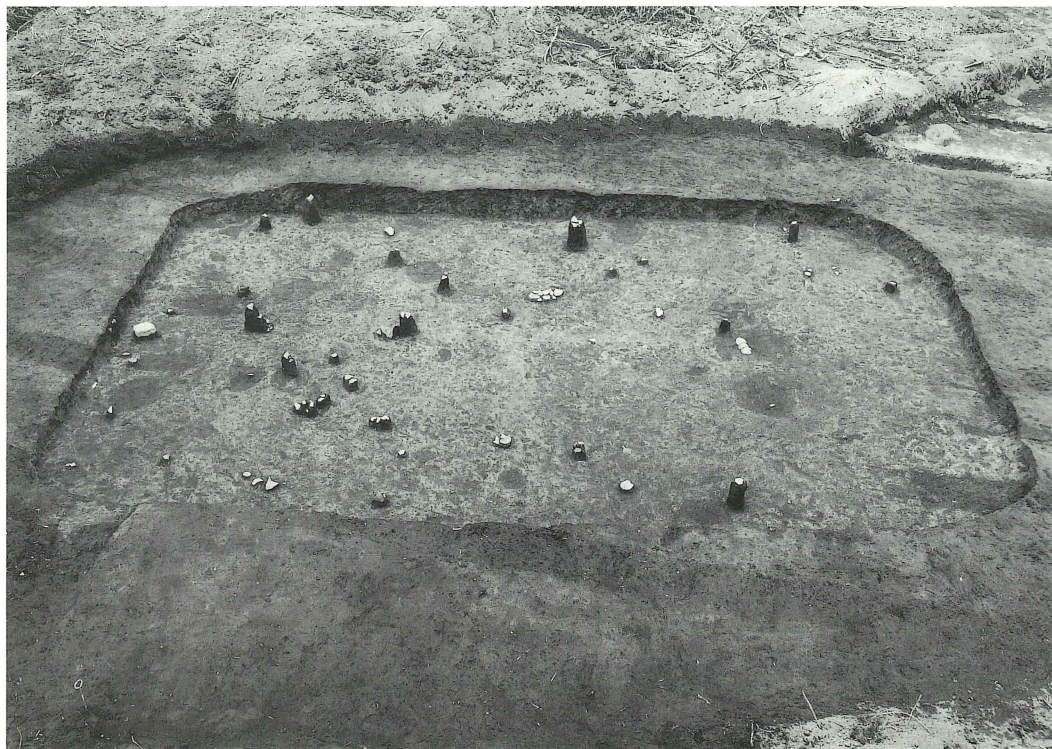


1号住炉

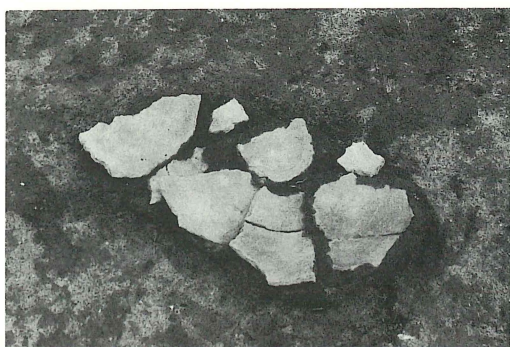


1号住居址全景

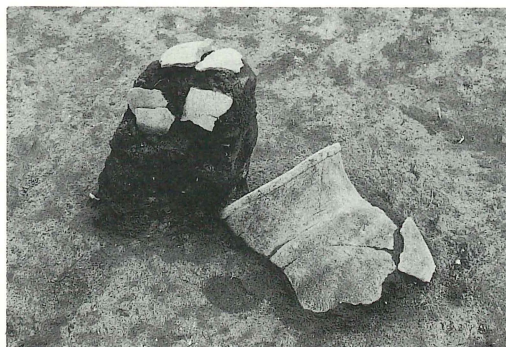




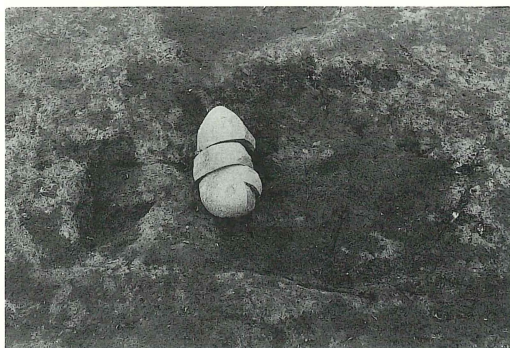
2号住居址遺物出土狀態



2号住遺物出土狀態



2号住遺物出土狀態



2号住炉



作業風景



PL-4



2号住居址全景



3号住居址全景

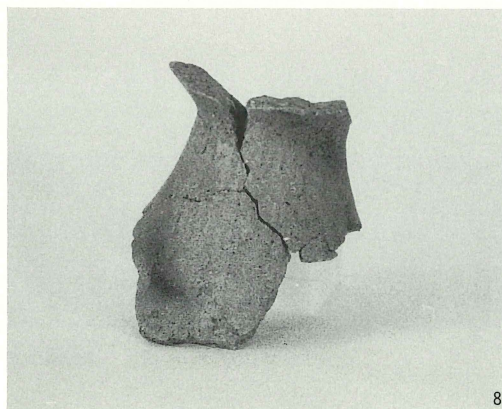
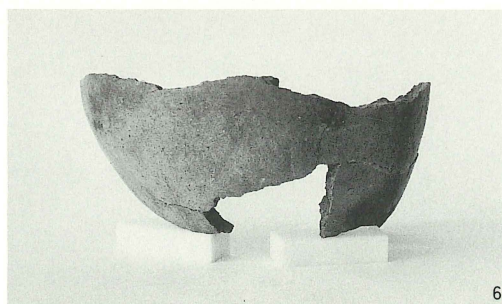
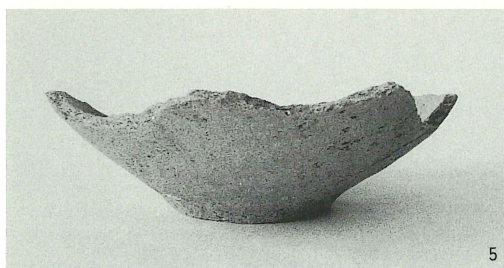
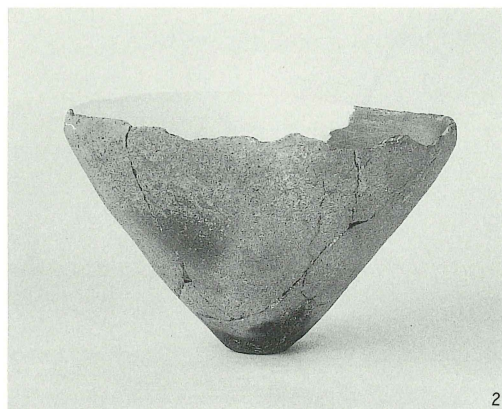
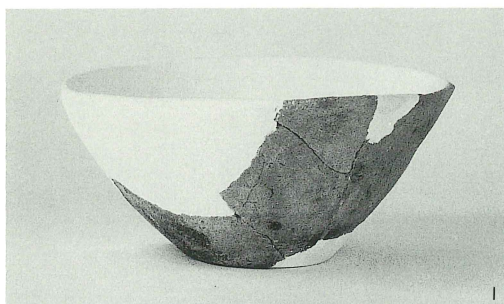




調査区全景（南から）

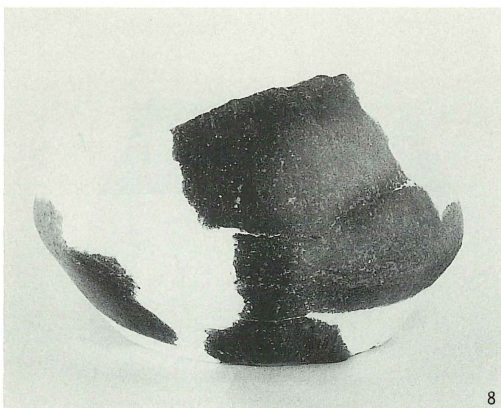
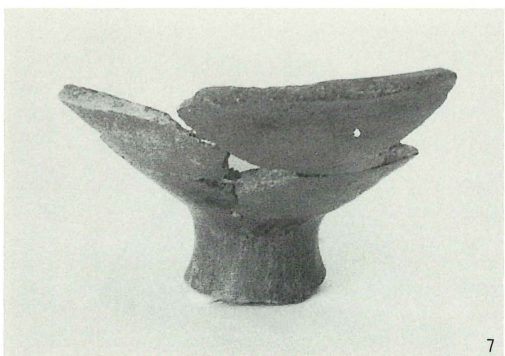
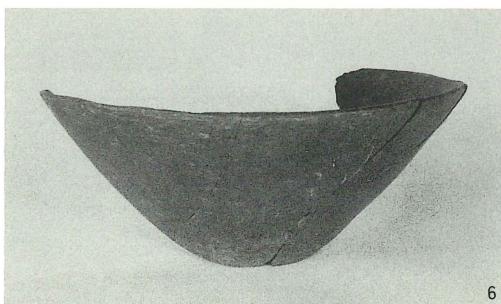
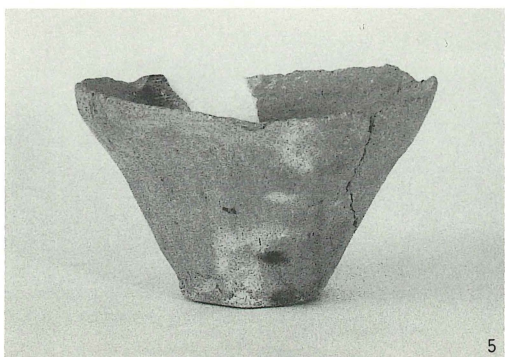
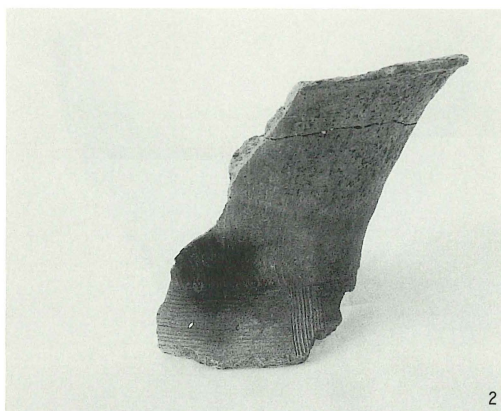
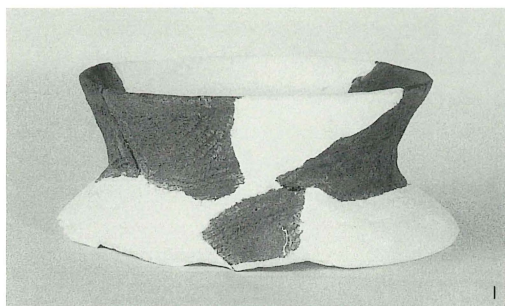


PL-6



1号住居址出土土器（1）





2号住居址出土土器 (1)



PL-8



2号住居址出土土器 (2)

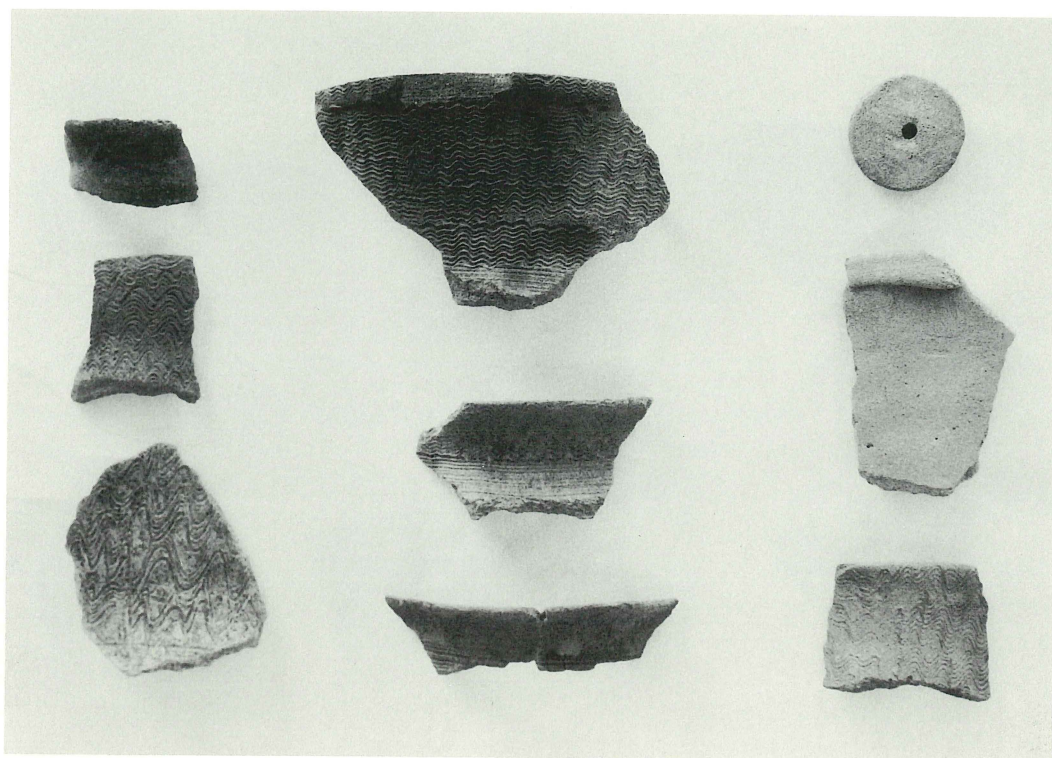


3号住居址出土土器



遺構外出土土器 (1)





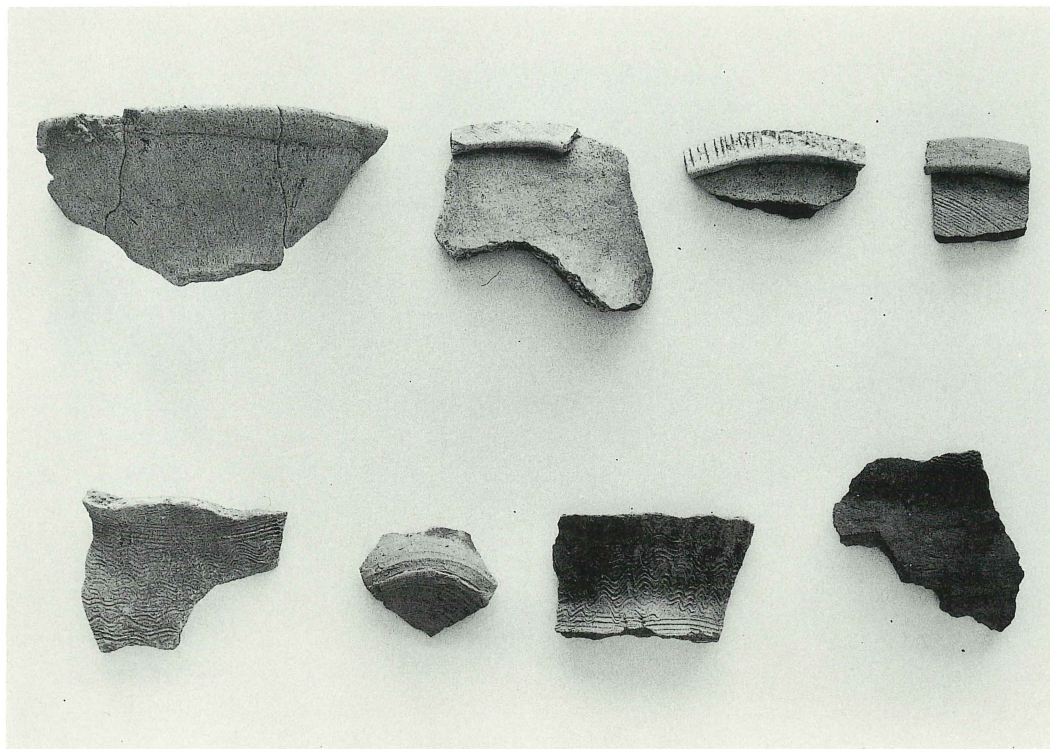
1号住居址出土土器(2)



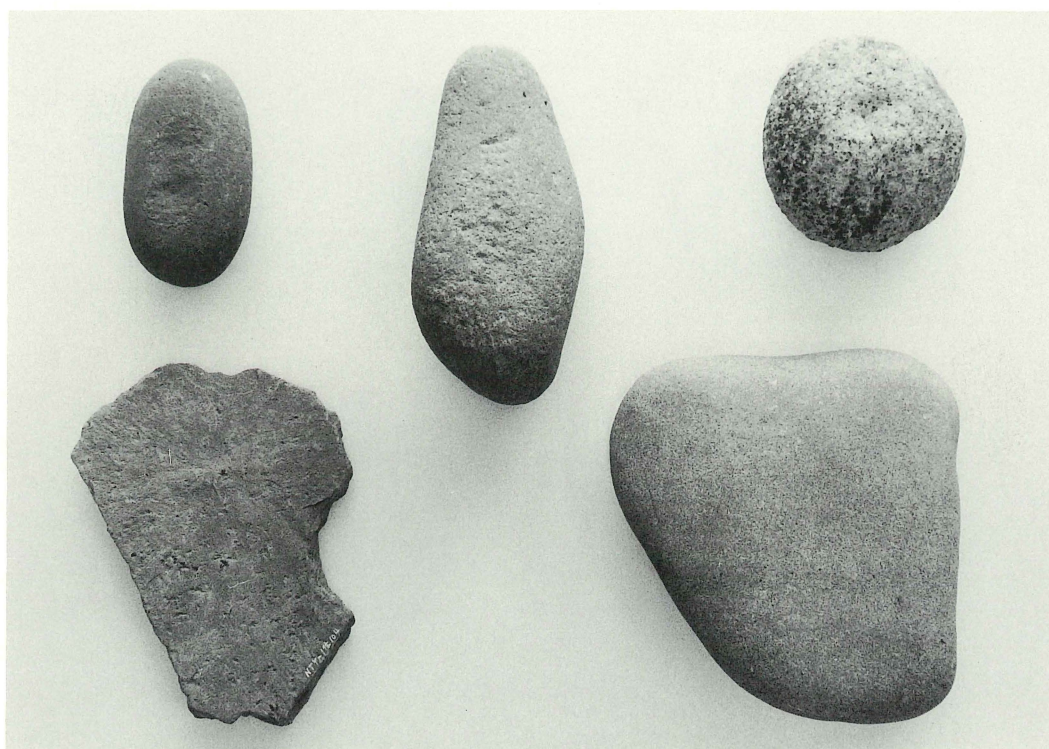
2号住居址出土土器(3)



PL-10



遺構外出土土器（2）

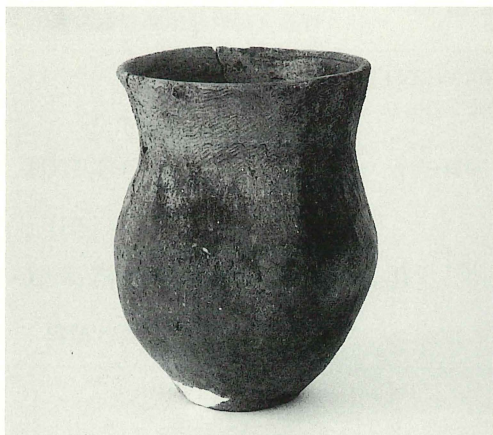
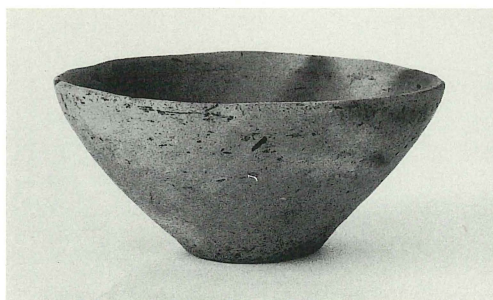


1号住居址出土石器（1）





2号住居址（左上）・遺構外出土石器



木村忠男氏所有畑より出土（一括）

戸神吉田遺跡

渡辺林産工業株式会社工場移転に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月31日

編集・発行

沼田市埋蔵文化財発掘調査団

沼田市西倉内町780

TEL (0278) 23-2111

印刷

朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町67

TEL (0272) 51-1212







